歌行燈

泉鏡花

一

宮重（みやしげ）大根のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみそなわす、七里のわたし浪（なみ）ゆたかにして、来往の渡船難なく桑名につきたる悦（よろこ）びのあまり……

と口誦（くちずさ）むように独言（ひとりごと）の、膝栗毛（ひざくりげ）五編の上の読初め、

霜月十日あまりの初夜。中空（なかぞら）は冴切（さえき）って、星が水垢離（みずごり）取りそうな月明（つきあかり）に、踏切の桟橋を渡る影高く、灯（ともしび）ちらちらと目の下に、遠近（おちこち）の樹立（こだち）の骨ばかりなのを視（なが）めながら、桑名の停車場（ステエション）へ下りた旅客がある。

月の影には相応（ふさわ）しい、真黒（まっくろ）な外套（がいとう）の、痩（や）せた身体（からだ）に

ちと広過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、真新しいはさて可(い)いが、馴(な)れない天窓(あたま)に山を立てて、鍔(つば)をしっくりと耳へ被(かぶ)さるばかり深く嵌(は)めた、あまつさえ、風に取られまいための留紐(とめひも)を、ぶらりと皺(しな)びた頬へ下げた工合(ぐあい)が、時世(ときよ)なれば、道中、笠も載(の)せられず、と断念(あきら)めた風に見える。年配六十二三の、気ばかり若い弥次郎兵衛(やじろべえ)。

さまで重荷ではないそうで、唐草模様の天鵞絨(びろうど)の革鞄(かばん)に信玄袋を引摺(ひきから)めて、こいつを片手。片手に蝙蝠傘(こうもりがさ)を支(つ)きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤(やきはまぐり)に酒汲(く)みかわし

て、……と本文(ほんもん)にある処(ところ)さ、旅籠屋(はたごや)へ着(ちゃく)の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾けて参ろうかな。（どうだ、喜多八(きだはち)。）と行きたいが、其許(そのもと)は年上で、ちとそりが合わぬ。だがね、家元の弥次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴(つれ)の喜多八にはぐれて、一人旅のとぼとぼと、棚からぶら下った宿屋を尋ねあぐんで、泣きそうになったとあるです。ところで其許は、道中松並木で出来た道づれの格だ。その道づれと、何(な)んと一口遣(や)ろうではないか、ええ、捻平(ねじべい)さん。」

「また、言うわ。」

と苦い顔を渋くした、同伴(つれ)の老人は、まだ、その上

を四つ五つで、やがて七十（ななそじ）なるべし。臘虎（らっこ）皮の鍔（つば）なし古帽子を、白い眉尖（まゆさき）深々と被（かぶ）って、鼠の羅紗（らしゃ）の道行（みちゆき）着た、股引（ももひき）を太く白足袋の雪駄穿（せったばき）。色褪（あ）せた鬱金（うこん）の風呂敷、真中（まんなか）を紐で結（ゆわ）えた包を、西行背負（さいぎょうじょい）に胸で結んで、これも信玄袋を手に一つ。片手に杖（つえ）は支（つ）いたけれども、足腰はしゃんとした、人柄の可（い）いお爺様（じいさま）。

「その捻平は止（よ）しにさっしゃい、人聞きが悪うてならん。道づれは可（よ）けれども、道中松並木で出来たと言うで、何とやら、その、私（わし）が護摩（ごま）の灰ででもあるように聞えるじゃ。」と杖を一つとんと支くと、後（あと）の雁（がん）が前（さき）になって、改札口を早々（さっさ）と出る。

わざと一足後(うしろ)へ開いて、隠居が意見に急ぐような、連(つれ)の後姿をじろりと見ながら、

「それ、そこがそれ捻平さね。松並木で出来たと云って、何もごまのはいには限るまい。もっとも若い内は遣ったかも知れんてな。ははは、」

人も無げに笑う手から、引手繰(ひったく)るように切符を取られて、はっと駅夫の顔を見て、きょとんと生真面目(きまじめ)。

成程、この小父者(おじご)が改札口を出た殿(しんがり)で、何をふらふら道草したか、汽車はもう遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のように月下に吐いて、真蒼(まっさお)な野路を光って通る。……

「やがてここを立出(たちい)で辿(たど)り行(ゆ)くほどに、旅人の唄うを聞けば、」

と小父者、出た処で、けろりとしてまた口誦(くちずさ)んで、

「捻平さん、可(い)い文句だ、これさ。……

　時雨蛤(しぐれはまぐり) みやげにさんせ

　　宮(みや)のおかめが、……ヤレコリヤ、よオし

よし。」

「旦那(だんな)、お供はどうで、」

と停車場(ステエション)前の夜の隈(くま)に、四五台朦朧(もうろう)と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組みをして、のっそり出る。

これを聞くと弥次郎兵衛、口を捻(ね)じて片頬笑(かたほえ)み、
「有難(ありがて)え、図星という処へ出て来たぜ。が、同じ事を、これ、(旦那衆戻り馬乗らんせんか、)となぜ言わぬ。」
「へい、」と言ったが、車夫は変哲もない顔色(がんしょく)で、そのまま棒立。

二

小父者(おじご)は外套の袖をふらふらと、酔ったような風附(ふうつき)で、
「遣(や)れよ、さあ、(戻馬乗らんせんか、)と、後生(ごしょう)だか

ら一つ気取ってくれ。」
「へい、（戻馬乗らせんか、）と言うでございますかね、戻馬乗らんせんか。」
と早口で車夫は実体(じってい)。
「はははは、法性寺入道前(ほうしょうじのにゅうどうさき)の関白太政大臣(かんぱくだじょうだいじん)と言ったら腹を立ちやった、法性寺入道前の関白太政大臣様と来ている。」とまたアハハと笑う。
「さあ、もし召して下さい。」
と話は極(きま)った筈(はず)にして、委細構わず、車夫は取着(とッつ)いて梶棒(かじぼう)を差向ける。
小父者、目を据えてわざと見て、

「ヤレコリャ車なんぞ、よオしよし。」

「いや、よしではない。」

とそこに一人つくねんと、添竹（そえだけ）に、その枯菊（かれぎく）の縋（すが）った、霜の翁（おきな）は、旅のあわれを、月空に知った姿で、

「早く車を雇わっしゃれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、何を当（あて）にぶらつこうで。」と口叱言（くちこごと）で半ば呟（つぶや）く。

「いや、まず一つ、（よヲしよし、）と切出さんと、本文に合わぬてさ。処へ喜多八が口を出して、（しょうろく四銭（しもん）で乗るべいか。）馬士（うまかた）が、（そんなら、ようせよせ。）と言いやす、馬がヒインヒインと嘶（いば）う。」

「若いもの、その人に構うまい。車を早く。川口の湊屋（みなとや）と言う旅籠屋（はたごや）へ行（ゆ）くのじゃ。」

「ええ、二台でござりますね。」

「何んでも構わぬ、私（わし）は急ぐに……」と後向（うしろむ）きに摑（つか）まって、乗った雪駄を爪立（つまだ）てながら、蹴込（けこ）みへ入れた革鞄を跨（また）ぎ、首に掛けた風呂敷包みを外ずしもしないで揺（ゆす）っておく。

「一蓮託生（いちれんたくしょう）、死なば諸共、捻平待ちやれ。」と、くすくす笑って、小父者も車にしゃんと乗る。……

「湊屋だえ、」

「おいよ。」

で、二台、月に提灯(かんばん)の灯(あかり)黄色に、広場(ひろっぱ)の端へ駈込(かけこ)むと……石高路(いしたかみち)をがたがたしながら、板塀の小路、土塀の辻、径路(ちかみち)を縫うと見えて、寂しい処幾曲り。やがて二階屋が建続き、町幅が糸のよう、月の光を廂(ひさし)で覆(おお)うて、両側の暗い軒に、掛行燈(かけあんどん)が疎(まばら)に白く、枯柳に星が乱れて、壁の蒼(あお)いのが処々。長い通りの突当りには、火の見の階子(はしご)が、遠山(とおやま)の霧を破って、半鐘(はんしょう)の形活(い)けるがごとし。……火の用心さっさりやしよう、金棒(かなぼう)の音に夜更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓(こ)達は宵寝と見える、寂しい新地(くるわ)へ差掛(さしかか)った。

輻(やぼね)の下に流るる道は、細き水銀の川のごとく、柱の黒い家の状(さま)、あたかも獺(かわうそ)が祭礼(まつり)をして、白張(しらはり)の地口行燈(じぐちあんどん)を掛連ねた、鉄橋を渡るようである。

爺様の乗った前の車が、はたと留(とま)った。

あれ聞け……寂寞(ひっそり)とした一条廓(ひとすじくるわ)の、棟瓦(むねがわら)にも響き転げる、轍(わだち)の音も留まるばかり、灘(なだ)の浪を川に寄せて、千里の果(はて)も同じ水に、筑前の沖の月影を、白銀(しろがね)の糸で手繰ったように、星に晃(きら)めく唄の声。

博多帯(はかたおび)しめ、筑前絞(ちくぜんしぼり)、
田舎の人とは思われぬ、
歩行(ある)く姿が、柳町、

と博多節を流している。……つい目の前（さき）の軒陰に。……白地の手拭（てぬぐい）、頬被（ほおかむり）、すらりと痩（やせ）ぎすな男の姿の、軒のその、うどんと紅（べに）で書いた看板の前に、横顔ながら俯向（うつむ）いて、ただ影法師のように彳（たたず）むのがあった。

捻平はフト車の上から、頸（うなじ）の風呂敷包のまま振向いて、何か背後（うしろ）へ声を掛けた。……と同時に弥次郎兵衛の車も、ちょうどその唄う声を、町の中で引挟（ひっぱさ）んで、がっきと留まった。が、話の意味は通ぜずに、そのまま捻平のがまた曳出（ひきだ）す……後（あと）の車も続いて駈（か）け出す。と二台がちょっと摺（す）れ摺れになって、すぐ旧（もと）の通り前後（あとさき）に、流るるような月夜の車。

三

お月様がちょいと出て松の影、

アラ、ドッコイショ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたように、霜を切って、唄い棄てた。……饂飩屋の門に博多節を弾いたのは、転進をやや縦に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、その柄で弾くようにして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「ご免なさいよ。」

頬被（ほおかむ）りの中の清（すず）しい目が、釜（かま）から吹出す湯気の裏（うち）へすっきりと、出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨（また）いで、腰掛けながら、うっかり聞惚（ききと）れていた亭主で、紺の筒袖にめくら縞（じま）の前垂（まえだれ）がけ、草色の股引（ももひき）で、尻からげの形（なり）、にょいと立って、

「出ないぜえ。」

は、ずるいな。……案ずるに我が家の門附（かどづけ）を聞徳（ききどく）に、いざ、その段になった処で、件（くだん）の（出ないぜ。）を極（き）めてこまそ心積りを、唐突（だしぬけ）に頬被を突込（つっこ）まれて、大分狼狽（うろた）えたものらしい。もっとも居合わした客はなかった。

門附は、澄まして、背後(うしろ)じめに戸を閉(た)てながら、三味線を斜(はす)にずっと入って、

「あい、親方は出ずとも可(い)いのさ。私の方で入るのだから。……ねえ、女房(おかみ)さん、そんなものじゃありませんかね。」

とちと笑声が交って聞えた。

女房は、これも現下(いま)の博多節に、うっかり気を取られて、釜前の湯気に朦(もう)として立っていた。……浅葱(あさぎ)の襷(たすき)、白い腕を、部厚な釜の蓋(ふた)にちょっと載(の)せたが、丸髷(まるまげ)をがっくりさした、色の白い、歯を染めた中年増(ちゅうどしま)。この途端に颯(さっ)と瞼(まぶた)を赤うしたが、竈(へッつい)の前を横ツちょ

に、かかたと下駄の音で、亭主の膝を斜交(はすっか)いに、帳場の銭箱(ぜにばこ)へがっちりと手を入れる。

「ああ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戯(じょうだん)だ、強請(ゆする)んじゃありません。こっちが客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六畳ばかりの市松畳、そこへ上れば坐れるのを、釜に近い、床几(しょうぎ)の上に、ト足を伸ばして、

「どうもね、寒くって堪(たま)らないから、一杯御馳走(ごちそう)になろうと思って。ええ、親方、決してその御迷惑を掛け

るもんじゃありません。」

で、優柔(おとな)しく頬被りを取った顔を、と見ると迷惑どころかい、目鼻立ちのきりりとした、細面(ほそおもて)の、瞼(まぶた)に窶(やつれ)は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九の人品(ひとがら)な兄哥(あにい)である。

「へへへへ、いや、どうもな、」

と亭主は前へ出て、揉手(もみで)をしながら、

「しかし、このお天気続きで、まず結構でござりやすよ。」と何もない、煤(すす)けた天井を仰ぎ仰ぎ、帳場の上の神棚へ目を外(そ)らす。

「お師匠さん、」

女房前垂をちょっと撫(な)でて、

「お銚子(ちょうし)でございますかい。」と莞爾(にっこり)する。

門附は手拭の上へ撥(ばち)を置いて、腰へ三味線を小取廻(ことりまわ)し、内端(うちわ)に片膝を上げながら、床几の上に素足の胡坐(あぐら)。

ト裾(すそ)を一つ掻込(かいこ)んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「ええ、もう飛切りのをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩行(よこある)き。左側の畳に据えた火鉢の中を、邪険に火箸(ひばし)で掻(か)い掘(ほじ)って、赫(かっ)と赤くなった処を、床几の門附へずいと寄せ、

「さあ、まあ、お当りなさりまし。」

「難有え、」
と鉄拐に棲へ引挟んで、ほうと呼吸を一つ長く吐いた。
「世の中にゃ、こんな炭火があると思うと、里心が付いてなお寒い。堪らねえ。女房さん、銚子をどうかね、ヤケという熱燗にしておくんなさい。ちっと飲んで、うんと酔おうという、卑劣な癖が付いてるんだ、お察しものですぜ、ええ、親方。」
「へへへ、お方、それ極熱じゃ。」
女房は染めた前歯を美しく、
「あいあい。」

四

「時に何かね、今此家（ここ）の前を車が二台、旅の人を乗せて駈抜（かけぬ）けたっけ、この町を、……」

と干した猪口（ちょく）で門（かど）を指して、

「二三町行った処で、左側の、屋根の大きそうな家へ着けたのが、蒼（あお）く月明りに見えたがね、……あすこは何かい、旅籠屋（はたごや）ですか。」

「湊屋（みなとや）でございまさ、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。この土地じゃ、まああすこ一軒でござりますよ。古い家じゃが名代（なだい）で。前（せん）には大きな女郎屋じゃったのが、旅籠屋になったがな、部屋々々も昔風そのままな家（うち）じゃに、奥座敷の欄干（てすり）の外が、海と一所の、大（いか）い揖斐（いび）の川口（かわぐち）じゃ。白帆の船も通りますわ。鱸（すずき）は刎（は）ねる、鯔（ぼら）は飛ぶ。とんと類のない趣（おもむき）のある家じゃ。ところが、時々崖裏の石垣から、獺（かわうそ）が這込（はいこ）んで、板廊下や厠（かわや）に点（つ）いた燈（あかり）を消して、悪戯（いたずら）をするげに言います。が、別に可恐（おそろし）い化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩（はちたた）きをして見せる。……

……時雨（しぐ）れた夜さりは、天保銭（てんぽうせん）一つ使賃で、豆腐を買い

に行くと言う。それも旅の衆の愛嬌じゃ言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、この土地はまだ何も知りなさらんかい。」
「あい、昨夜初めてこっちへ流込んで来たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜も闇の烏さね。」
と俯向いて、一口。
「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣ったり！
ほっ、」
と言って、目を擦って面を背けた。
「利く、利く。……恐しい利く唐辛子だ。こう、親方の前だがね、ついこないだもこの手を食ったよ、料簡

が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯（ほおづき）の皮が精々だろう。利くものか、と高を括（くく）って、お銭（あし）は要らない薬味なり、どしこと丼へぶちまけて、松坂で飛上った。……また遣ったさ、色気は無えね、涙と涎（よだれ）が一時（いっとき）だ。」

と手の甲で引擦（ひっこす）る。

女房が銚子のかわり目を、ト掌（てのひら）で燗（かん）を当った。

「お師匠さん、あんたは東の方（かた）ですなあ。」

「そうさ、生（うまれ）は東だが、身上（しんしょう）は北山さね。」と言う時、徳利の底を振って、垂々（たらたら）と猪口（ちょく）へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさろうと言うのかな。」

それだ、と門口で断らりょう、と亭主はその段含ま

せたそうな気の可い顔色。
「御串戯もんですぜ、泊りは木賃と極っていまさ。茣蓙と笠と草鞋が留守居。壁の破れた処から、鼠が首を長くして、私の帰るのを待っている。四五日はこの桑名へ御厄介になろうと思う。……上旅籠の湊屋で泊めてくれそうな御人品なら、御当家へ、一夜の御無心申したいね、どんなもんです、女房さん。」
「こんなでよくば、泊めますわ。」
と身軽に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動かし、
「滅相な。」と帳場を背負って、立塞がる体に腰を掛け

た。いや、この時まで、紺の鯉口（こいぐち）に手首を縮（すく）めて、案山子（かかし）のごとく立ったりける。
「ははは、お言葉には及びません、饂飩屋さんで泊めるものは、醤油（おしたじ）の雨宿りか、鰹節（かつおぶし）の行者だろう。」
と呵々（からから）と一人で笑った。
「お師匠さん、一つお酌さしておくんなさいまし。」と女房は市松の畳の端から、薄く腰を掛込んで、土間を切って、差向いに銚子を取った。
「飛んでもない事、お忙しいに。」
「いえな、内じゃ芸妓屋（げいこや）さんへ出前ばかりが主（おも）ですから、ごらんの通りゆっくりじゃえな。ほんにお師匠さ

ん佳（い）いお声ですな。なあ、良人（あんた）。」と、横顔で亭主を流眄（ながしめ）。

「さよじゃ。」

とばかりで、煙草（たばこ）を、ぱっぱっ。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたれば
な、……私や、ほんに、身に染みて、ぶるぶると震えました。」

五

「そう讃（ほ）められちゃお座が醒（さ）める、酔も醒めそうで遣瀬（やるせ）がない。たかが大道芸人さ。」

と兄哥（あにい）は照れた風で腕組みした。

「私がお世辞を言うものですかな、真実（まったく）ですえ。あの、その、なあ、悚然（ぞっ）とするような、恍惚（うっとり）するような、緊（し）めたような、投げたような、緩めたような、まあ、何（な）んと言うて可（よ）かろうやら。海の中に柳があったら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいような、……何んとも言いようのない心持になったのですえ。」

と、脊筋を曲（くね）って、肩を入れる。

「お方（かた）、お方。」

と急込（せきこ）んで、訳もない事に不機嫌な御亭（ごてい）が呼ばわる。

「何じゃいし。」と振向くと、……亭主いつの間にか、

神棚の下(もと)に、斜(しゃ)と構えて、帳面を引繰(ひっく)って、苦く睨(にら)み、

「升屋(ますや)が懸(かけ)はまだ寄越さんかい。」

と算盤(そろばん)を、ぱちりぱちり。

「今時どうしたえ、三十日(みそか)でもありもせんに。……お師匠さん。」

「師匠じゃないわ、升屋が懸じゃい。」

「そないに急に気になるなら、良人(あんた)、ちゃと行って取って来(き)い。」

と下唇の刎調子(はねぢょうし)。亭主ぎゃふんと参った体(てい)で、

「二進が一進、二進が一進、二一(にいち)天作の五(ご)、五一三六七八九(ぐいちさぶろくななやあここの)。」と、饂飩の帳の伸縮(のびちぢ)みは、加減(さしひき)だけ

で済むものを、醤油(したじ)に水を割算段。

と釜の湯気の白けた処へ、星の凍(い)てそうな按摩(あんま)の笛。

月天心(つきてんしん)の冬の町に、あたかもこれ凩(こがらし)を吹込む声す。

　門附の兄哥(あにい)は、ふと痩(や)せた肩を抱いて、

「ああ、霜に響く。」……と言った声が、物語を読むように、朗(ほがらか)に冴(さ)えて、且つ、鋭く聞えた。

「按摩が通る……女房(おかみ)さん、」

「ええ、笛を吹いてですな。」

「畜生、怪(け)しからず身に染みる、堪(たま)らなく寒いものだ。」

　と割膝に跪坐(かしこま)って、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗に傾け、ざぶりと土間へ、

「一ツこいつへ注（つ）いでおくんな、その方がお前さんも手数が要らない。」

「何んの、私はちっとも構うことないのですえ。」

「いや、御深切は難有（ありがた）いが、薬罐（やかん）の底へ消炭（けしずみ）で、湧（わ）くあとから醒（さ）める処へ、氷で咽喉（のど）を抉（えぐ）られそうな、あのピイピイを聞かされちゃ、身体（からだ）にひびっ裂（たけ）がはいりそうだ。……持って来な。」

と手を振るばかりに、一息にぐっと呷（あお）った。

「あれ、お見事。」

と目を睜（みは）って、

「まあな、だけれどな、無理酒おしいなえ。沢山（たんと）、あ

の、心配する方があるのですやろ。」
「お方、八百屋の勘定は。」
と亭主瞬（まばた）きして頤（あご）を出す。女房は面白半分、見返りもしないで、
「取りに来たらお払いやすな。」
「ええ……と三百は三銭かい。」
で、算盤を空に弾（はじ）く。
「女房（おかみ）さん。」
と呼んだ門附の声が沈んだ。
「何んです。」
「立続けにもう一つ。そして後（あと）を直ぐ、合点（がってん）かね。」

「あい。合点でございますが、あんた、豪(えら)い大酒(たいしゅ)ですな。」

「せめて酒でも参らずば。」

と陽気な声を出しかけたが、つと仰向(あおむ)いて眦(まなじり)を上げた。

「あれ、また来たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。……ヤ、そんなにまだ夜は更けまいのに、屋根越(ごし)の町一つ、こう……田圃(たんぼ)の畔(あぜ)かとも思う処でも吹いていら。」

と身忙(みぜわ)しそうに片膝立てて、当所(あてど)なく眗(みまわ)しながら、

「音(おと)は同じだが音(ね)が違う……女房(おかみ)さん、どれが、どん

な顔（つら）の按摩だね。」

と聞く。……その時、白眼（しろまなこ）の座頭の首が、月に蒼（あお）ざめて覗（のぞ）きそうに、屋の棟を高く見た……目が鋭い。

「あれ、あんた、鹿の雌雄（めすおす）ではあるまいし、笛の音で按摩の容子（ようす）は分りませぬもの。」

「まったくだ。」

と寂しく笑った、なみなみ注（つ）いだる茶碗の酒を、屹（きっ）と見ながら、

「杯の月を酌（く）もうよ、座頭殿。」と差俯（さしうつむ）いて独言（ひとりごと）した。

……が博多節の文句か、知らず、陰々として物寂しい、表の障子も裏透くばかり、霜の月の影冴えて、辻に、

町に、按摩の笛、そのあるものは波に響く。

六

「や、按摩どのか。何んだ、唐突（だしぬけ）に驚かせる。……要らんよ。要りませぬ。」

と弥次郎兵衛。湊屋の奥座敷、これが上段の間とも見える、次に六畳の附いた中古（ちゅうぶる）の十畳。障子の背後（うしろ）は直ぐに縁、欄干（てすり）にずらりと硝子戸（がらすど）の外は、水煙渺（みずけむりびょう）として、曇らぬ空に雲かと見る、長洲（ながす）の端に星一つ、水に近く晃（き）らめいた、揖斐川の流れの裾（すそ）は、潮（うしお）を籠（こ）め

た霧白く、月にも苫(とま)を伏せ、蓑(みの)を乾(ほ)す、繋船(かかりぶね)の帆柱がすくすくと垣根に近い。そこに燭台を傍(かたわら)にして、火桶(ひおけ)に手を懸け、怪訝(けげん)な顔して、

「はて、お早いお着きお草臥(くたび)れ様で、と茶を一ツ持って出て、年増(としま)の女中が、唯今(ただいま)引込(ひっこ)んだばかりの処。これから膳にもしよう、酒にもしようと思うちょっとの隙間へ、のそりと出した、あの面(つら)はえ？……

この方、あの年増めを見送って、入交(いりかわ)って来るは若いのか、と前髪の正面でも見ようと思えば、霜げた冬瓜(とうがん)に草鞋(わらじ)を打着(ぶちつ)けた、という異体な面(つら)を、襖(ふすま)の影から斜(はす)に出して、

（按摩でやす。）とまた、悪く抜衣紋（ぬきえもん）で、胸を折って、横坐りに、蠟燭（ろうそく）火へ紙火屋（かみぼや）のかかった灯（あかり）の向うへ、ぬいと半身で出た工合が、見越入道（みこしにゅうどう）の御館（おやかた）へ、目見得（めみえ）の雪女郎を連れて出た、化（ばけ）の慶庵と言う体（てい）だ。

要らぬと言えば、黙然（だんまり）で、腰から前（さき）へ、板廊下の暗い方へ、スーと消えたり……怨敵（おんてき）、退散（たいさん）。」

と苦笑いして、……床の正面に火桶を抱えた、法然天窓（ほうねんあたま）の、連（つれ）の、その爺様を見遣って、

「捻平さん、お互に年は取りたくないてね。ちと三絃（ぺんぺん）でも、とあるべき処を、お膳の前に按摩が出ますよ。……見くびったものではないか。」

「とかく、その年効(としが)いもなく、旅籠屋の式台口から、何んと、事も慇懃(いんぎん)に出迎えた、家(うち)の隠居らしい切髪の婆様(ばあさま)をじろりと見て、

(ヤヤ、難有(ありがた)い、仏壇の中に美婦(たぼ)が見えるわ、簀(す)の子の天井から落ち度(た)い。)などと、膝栗毛の書抜きを遣らっしゃるで魔が魅(さ)すのじゃ、屋台は古いわ、造りも広大。」

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料(はか)られぬ。燈(あかり)も暗いわ、獺(かわうそ)も出ようず。ちと懲(こ)りさっしゃるが可(い)い。」

「さん候(ぞうろう)、これに懲りぬ事なし。」

と奥歯のあたりを膨らまして微笑(ほほえ)みながら、両手を懐に、胸を拡く、襖(ふすま)の上なる額を読む。題して曰(いわ)く、臨風榜可小楼(りんぷうぼうかしょうろう)。

「……とある、いかさまな。」

「床に活(い)けたは、白の小菊じゃや、一束(ひとたば)にして摑(つか)みざし、喝采(おお)。」と讃(ほ)める。

「いや、翁寂(おきなさ)びた事を言うわ。」

「それそれ、たったいま懲りると言うた口の下から、何んじゃや、それは。やあ、見やれ、其許(そこ)の袖口から、茶色の手の、もそもそとした奴(やつ)が、ぶらりと出たわ、揖斐川の獺(かわうそ)の。」

「ほい、」

と視(なが)めて、

「南無三宝(なむさんぼう)。」と慌(あわただ)しく引込(ひっこ)める。

「何んじゃそれは。」

「はははは、拙者うまれつき粗忽(そこつ)にいたして、よくものを落す処から、内の婆(ばばあ)どのが計略で、手袋を、ソレ、ト左右糸で繋(つな)いだものさね。袖から胸へ潜(くぐ)らして、ずいと引張(ひっぱ)って両手へ嵌(は)めるだ。何んと恐しかろう。捻平さん、かくまで身上(しんしょう)を思うてくれる婆どのに対しても、無駄な祝儀は出せませんな。ああ、南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)。」

「狸（たぬき）めが。」

と背を円くして横を向く。

「それ、年増が来る。秘すべし、秘すべし。」

で、手袋をたくし込む。

処へ女中が手を支（つ）いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、やっと、今草鞋（わらじ）を解いたばかりだ。泊めてもらうから、支度はしません。」と真面目に言う。

色は浅黒いが容子（ようす）の可（い）い、その年増の女中が、これには妙な顔をして、

「へい、御飯は召あがりますか。」

「まず酒から飲みます。」
「あの、めしあがりますものは？」
「姉さん、ここは約束通り、焼蛤（やきはまぐり）が名物だの。」

七

「そのな、焼蛤は、今も町はずれの葦簀張（よしずばり）なんぞでいたします。やっぱり松毬（まつかさ）で焼きませぬと美味（おいし）うござりませんで、当家（うち）では蒸したのを差上げます、味淋（みりん）入れて味美（あじよ）う蒸します。」
「ははあ、栄螺（さざえ）の壺焼（つぼやき）といった形、大道店で遣ります

な。……松並木を向うに見て、松毬のちょろちょろ火、蛤の煙がこの月夜に立とうなら、とんと竜宮の田楽(でんがく)で、乙姫様(おとひめさま)が洒落(しゃれ)に姉(あね)さんかぶりを遊ばそうという処、また一段の趣(おもむき)だろうが、わざとそれがために忍んでも出られまい。……当家(ここ)の味淋蒸、それが好(よ)かろう。」

と小父者(おじご)納得した顔して頷(うなず)く。

「では、蛤でめしあがりますか。」

「何?」と、わざとらしく［＃「わざとらしく」は底本では「わざとしらく」］耳を出す。

「あのな、蛤であがりますか。」

「いや、箸(はし)で食いやしょう、ははははは。」

と独(ひとり)で笑って、懐中から膝栗毛の五編を一冊、ポンと出して、

「難有(ありがた)い。」と額を叩く。

女中も思わず噴飯(ふきだ)して、

「あれ、あなたは弥次郎兵衛様でございますな。」

「その通り。……この度の参宮には、都合あって五二館と云うのへ泊ったが、内宮様(ないぐうさま)へ参る途中、古市(ふるいち)の旅籠屋、藤屋の前を通った時は、前度いかい世話になった気で、薄暗いまで奥深いあの店頭(みせさき)に、真鍮(しんちゅう)の獅噛火鉢(しかみひばち)がぴかぴかとあるのを見て、略儀ながら、車の上から、帽子を脱いでお辞儀をして来た。が、町が

狭いので、向う側の茶店の新姐（しんぞ）に、この小兀（すこはげ）を見せるのが辛かったよ。」

と燈（あかり）に向けて、てらりと光らす。

「ほほ、ほほ。」

「あはは。」

で捻平も打笑うと、……この機会に誘われたか、――

――先刻（さっき）二人が着いた頃には、三味線太鼓で、トトン、ジャカジャカじゃじゃじゃんと沸返るばかりだった――

――ちょうど八ツ橋形に歩行板（あゆみ）が架（かか）って、土間を隔てた隣の座敷に、およそ十四五人の同勢で、女交りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、大河（おおかわ）の

汐（しお）に引かれたらしく、ひとしきり人気勢（ひとけはい）が、遠くへ裾拡がりに茫（ぼう）と退（の）いて、寂（しん）とした。ただだだっ広い中を、猿が鳴きながら走廻るように、キャキャとする雛妓（おしゃく）の甲走（かんばし）った声が聞えて、重く、ずっしりと、覆（おっ）かぶさる風に、何を話すともなく多人数（たにんず）の物音のしていたのが、この時、洞穴（ほらあな）から風が抜けたように哄（どっ）と動揺（どよ）めく。

　女中も笑い引きに、すっと立つ。

「いや、この方は陰々としている。」

「その方が無事で可いの。」

　と捻平は火桶の上へ脊くぐまって、そこへ投出した膝栗毛を差覗（さしのぞ）き、

「しかし思いつきじゃ、私はどうもこの寝つきが悪いで、今夜は一つ枕許の行燈で読んでみましょう。」

「止しなさい、これを読むと胸が切って、なお目が冴えて寝られなくなります。」

「何を言わっしゃる、当事もない、膝栗毛を見て泣くものがあろうかい。私が事を言わっしゃる、其許がよっぽど捻平じゃ。」

と言う処へ、以前の年増に、小女がついて出て、膳と銚子を揃えて運んだ。

「蛤は直きに出来ます。」

「可、可。」

「何よりも酒の事。」
捻平も、猪口（ちょこ）を急ぐ。
「さて汝（てめえ）にも一つ遣ろう。燗（かん）の可い処を一杯遣らっし。」と、弥次郎兵衛、酒飲みの癖で、ちとぶるぶるする手に一杯傾けた猪口（ちょこ）を、膳の外へ、その膝栗毛の本の傍（わき）へ、畳の上にちゃんと置いて、
「姉さん、一つ酌（つ）いでやってくれ。」
と真顔で言う。
小女が、きょとんとした顔を見ると、捻平に追っかけの酌をしていた年増が見向いて、
「喜野（きの）、お酌ぎ……その旦那はな、弥次郎兵衛様じゃ

で、喜多八さんにお杯を上げなさるんや。」
と早や心得たものである。

八

小父者（おじご）はなぜか調子を沈めて、
「ああ、よく言った。俺（おれ）を弥次郎兵衛は難有（ありがた）い。居心（いごころ）は可（よし）、酒は可。これで喜多八さえ一所だったら、膝栗毛を正（しょう）のもので、太平の民となる処を、さて、杯をさしたばかりで、こう酌（つ）いだ酒へ、蠟燭（ろうそく）の灯（ひ）のちらちらと映る処は、どうやら餓鬼に手向（たむ）けたようだ。あのま

た馬鹿野郎はどうしている――」と膝に手を支(つ)き、畳の杯を凝(じっ)と見て、陰気な顔する。

捻平も、ふと、この時横を向いて腕組した。

「旦那、その喜多八さんを何んでお連れなさりませんね。」

と愛嬌造(あいきょうづく)って女中は笑う。弥次郎寂(さみ)しく打笑み、

「むむ、そりゃ何よ、その本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。いい年をして娑婆気(しゃばっけ)な、酒も飲めば巫山戯(ふざけ)もするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒いにつけ、杖柱(つえ)とも思う同伴(つれ)の若いものに別れると、六十の迷児(まいご)になって、もし、この辺に棚からぶ

ら下がったような宿屋はございませんかと、賑(にぎや)かな町の中を独りとぼとぼと尋ね飽倦(あぐ)んで、もう落胆(がっかり)しやした、と云ってな、どっかり知らぬ家(うち)の店頭(みせさき)へ腰を落込(おとしこ)んで、一服無心をした処……あすこを読むと串戯(じょうだん)ではない。……捻平さん、真からもって涙が出ます。」

と言う、瞼(まぶた)に映って、蠟燭の火がちらちらとする。

「姉や、心(しん)を切ったり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばたたいたが、

「ヤ、あの騒ぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越（ごし）の隣室（となり）へ傾き、

「豪（えら）いぞ、金盥（かなだらい）まで持ち出いたわ、人間は皆裾が天井へ宙乗りして、畳を皿小鉢が躍るそうな。おおおお、三味線太鼓が鎬（しのぎ）を削って打合う様子じゃや。」

「もし、お騒がしゅうござりましょう、お気の毒でござります。ちょうど霜月でな、今年度の新兵さんが入営なさりますで、その送別会じゃ言うて、あっちこっち、皆、この景気でござります。でもな、お寝（よ）ります時分には時間になるで静まりましょう。どうぞ御辛抱なさいまして。」

「いやいや、それには及ばぬ、それには及ばぬ。」

と小父者、二人の女中の顔へ、等分に手を掉って、
「かえって賑かで大きに可い。悪く寂寞して、また唐突に按摩に出られては弱るからな。」
「へい、按摩がな。」と何か知らず、女中も読めぬ顔して聞返す。
捻平この話を、打消すように咳して、
「さ、一献参ろう。どうじゃ、こちらへも酌人をちと頼んで、……ええ、それ何んとか言うの。……桑名の殿様時雨でお茶漬……とか言う、土地の唄でも聞こうではないかの。陽気にな、かっと一つ。旅の恥は掻棄てじゃ。主はソレ叱言のような勧進帳でも遣らっしゃ

い。

染めようにも髯は無いで、私はこれ、手拭でも畳んで法然天窓へ載せようでの。」と捻平が坐りながら腰を伸して高く居直る。と弥次郎眼を睜って、

「や、平家以来の謀叛、其許の発議は珍らしい、二方荒神鞍なしで、真中へ乗りやしょう。」

と夥しく景気を直して、

「姉え、何んでも構わん、四五人木遣で曳いて来い。」

と肩を張って大きに力む。

女中酌の手を差控えて、銚子を、膝に、と真直に立てながら、

「さあ、今あっちの座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、芸妓（げいこ）さんはあったかな。」

小女が猪首（いくび）で頷（うなず）き、

「誰も居やはらぬ言うてでやんした。」

「かいな、旦那さん、お気の毒さまでござります。狭い土地に、数のない芸妓やによって、こうして会なんぞ立込（たてこ）みますと、目星（めぼし）い妓（こ）たちは、ちゃっとの間に皆（みんな）出払います。そうか言うて、東京のお客様に、あんまりな人も見せられはしませずな、容色（きりょう）が好（い）いとか、芸がたぎったとかいうのでござりませぬとなあ……」

「いや、こうなっては、宿賃を払わずに、こちとら

夜遁（よにげ）をするまでも、三味線を聞かなきゃ納まらない。眇（めっかち）、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」

「待ちなさりまし。おお、あの島屋の新妓（しんこ）さんならきっと居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎじゃ、廊下走って、電話へ掛（かか）れや。」

九

「持って来い、さあ、何んだ風車（かざぐるま）。」

急に勢（いきおい）の可（い）い声を出した、饂飩屋に飲む博多節の

兄哥（あにい）は、霜の上の燗酒（かんざけ）で、月あかりに直ぐ醒（さ）める、色の白いのもそのままであったが、二三杯、呷切（あおっきり）の茶碗酒で、目の縁（ふち）へ、颯（さっ）と酔（よい）が出た。

「勝手にピイピイ吹いておれ、でんでん太鼓に笙（しょう）の笛、こっちぁ小児（こども）だ、なあ、阿媽（おっか）。……いや、女房（おかみ）さん、それにしても何かね、御当処は、この桑名と云う所は、按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。

「あんたもな、按摩の目は蠣（かき）や云います。名物は蛤（はまぐり）じゃもの、別に何も、多い訳はないけれど、ここは新地（しんち）なり、旅籠屋のある町やに因って、つい、あの衆（しゅ）が、あちこちから稼ぎに来るわな。」

「そうだ、成程新地（くるわ）だった。」となぜか一人で納得して、気の抜けたような片手を支（つ）く。

「お師匠さん、あんた、これからその音声（のど）を芸妓屋（げいこや）の門（かど）で聞かしてお見やす。ほんに、人死（ひとじに）が出来ようも知れぬぜな。」と襟の処で、塗盆をくるりと廻す。

「飛んだ合せかがみだね、人死が出来て堪（たま）るものか。第一、芸妓屋（げいしやや）の前へは、うっかり立てねえ。」

「なぜえ。」

「悪くすると敵（かたき）に出会（でっくわ）す。」と投首（なげくび）する。

「あれ、芸が身を助けると言う、……お師匠さん、あんた、芸妓（げいこ）ゆえの、お身の上かえ。……ほんにな、仇（かたき）

だすな。」

「違った！　芸者の方で、私が敵さ。」

「あれ、のけのけと、あんな憎いこと言いなさんす。」

と言う処へ、月は片明りの向う側。狭い町の、ものの気勢（けはい）にも暗い軒下を、からころ、からころ、駒下駄（こまげた）の音が、土間に浸込（しみこ）むように響いて来る。……と直ぐその足許（あしもと）を潜（くぐ）るように、按摩の笛が寂しく聞える。

門附は屹（きっ）と見た。

「噂をすれば、芸妓（げいこ）はんが通りまっせ。あんた、見たいなら障子を開けやす……そのかわり、敵打たりょうと思うてな。」

「ああ、いつでも打たれてやら。ちよツ、可厭(いや)に煩(うるさ)く笛を吹くない。」

かたりと門(かど)の戸を外から開ける。

「ええ、吃驚(びっくり)すら。」

「今晩は、――饂飩六ツ急いでな。」と草履穿(ぞうりば)きの半纏着(はんてんぎ)、背中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい。」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に突立(つッた)ち、

「お方、そりや早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい跫音(あしおと)やな、どこの？」と聞く。

「こないだ山田の新町から住替えた、こんの島家の

新妓（しんこ）じゃ。」と言いながら、鼻赤の若い衆は、覗（のぞ）いた顔を外に曲げる。

　と門附は、背後（うしろ）の壁へ胸を反らして、ちょっと伸上るようにして、戸に立つ男の肩越しに、皎（こう）とした月の廓（くるわ）の、細い通（とおり）を見透かした。

　駒下駄はちと音低く、まだ、からころと響いたのである。

「沢山（たんと）出なさるかな。」

「まあ、こんの饂飩のようには行かぬで。」

「その気で、すぐに届けますえ。」

「はい頼んます。」と、男は返る。

亭主帳場から背後(うしろ)向きに、日和下駄(ひよりげた)を探って下り、がたりびしりと手当り強く、そこへ広蓋(ひろぶた)を出掛(だしか)ける。ははあ、夫婦二人のこの店、気の毒千万、御亭が出前持を兼ねると見えたり。

「裏表とも気を注(つ)けるじゃ、可(え)いか、可いか。ちょっと道寄りをして来るで、可いか、お方。」

とそこいらじろじろと睨廻(ねめまわ)して、新地の月に提灯(ちょうちん)入(い)らず、片手懐にしたなりで、亭主が出前、ヤケにがっと戸を開けた。後(あと)を閉めないで、ひよこひよこ出て行(ゆ)く。

釜の湯気が颯(さっ)と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から来て、
「いつまで、うっかり見送ってじゃ、そんなに敵（かたき）が打たれたいの。」
「女房（おかみ）さん、桑名じゃあ……芸者の箱屋は按摩かい。」
と悚気（ぞっ）としたように肩を細く、この時やっと居直って、女房を見た、色が悪い。

十

「そうさ、いかに伊勢の浜荻（はまおぎ）だって、按摩の箱屋というのはなかろう。私もなかろうと思うが、今向う側を

何んとか屋の新妓（しんこ）とか云うのが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、一軒おき二軒おきの、軒行燈（のきあんどん）では浅葱（あさぎ）になり、月影では青くなって、薄い紫の座敷着で、褄（つま）を蹴出（けだ）さず、ひっそりと、白い襟を俯向（うつむ）いて、足の運びも進まないように何んとなく悄（しお）れて行く。……その後（あと）から、鼠色の影法師。女の影なら月に地（つち）を這（は）う筈（はず）だに、寒い道陸神（どうろくじん）が、のそのそと四五尺離れた処を、ずっと前方（むこう）まで附添ったんだ。腰附、肩附、歩行（ある）く振（ふり）、捏（で）っちて附着（くっつ）けたような不恰好（ぶかっこう）な天窓（あたま）の工合、どう見ても按摩だね、盲人（めくら）らしい、めんない千鳥よ。……私あ何んだ、だから、按摩が箱屋を

すると云っちゃ可笑(おかし)い、盲目(めくら)になった箱屋かも知れないぜ。」

「どんな風の、どれな。」

と門(かど)へ出そうにする。

「いや、もう見えない。呼ばれた家(うち)へ入ったらしい。二人とも、ずっと前方(さき)で居なくなった。そうか。ああ、盲目の箱屋は居ねえのか。アまた殖(ふ)えたぜ……影がさす、笛の音に影がさす、按摩の笛が降るようだ。この寒い月に積(つも)ったら、桑名の町は針の山になるだろう、堪(たま)らねえ。」

とぐいと呷(あお)って、

「ええ、ヤケに飲め、一杯どうだ、女房（おかみ）さん附合いねえ。御亭主は留守だが、明放（あけっぱな）しよ、……構うものか。それ向う三軒の屋根越に、雪坊主のような山の影が覗（のぞ）いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「来た、来た、来た、来やあがった、来やあがった、按摩々々、按摩。」

と呼吸（いき）も吐（つ）かず、続けざまに急込（せきこ）んだ、自分の声に、町の中に、ぬい、と立って、杖を脚許（あしもと）へ斜交（はすっか）いに突張（つっぱ）りながら、目を白く仰向（あおむ）いて、月に小鼻を照らされた流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、そのまま凍附（いてつ）

くように立留まったのも、門附はよく分らぬ状（さま）で、

「影か、影か、阿媽（おっかあ）、ほんとの按摩か、影法師か。」

と激しく聞く。

「ほんとなら、どうおしる。貴下（あんた）、そんなに按摩さんが恋しいかな。」

「恋しいよ！　ああ、」

と呼吸（いき）を吐（つ）いて、見直して、眉を顰（ひそ）めながら、声高（こわだか）に笑った。

「はははは、按摩にこがれてこの体（てい）さ。おお、按摩さん、按摩さん、さあ入ってくんねえ。」

門附は、撥（ばち）を除（の）けて、床几（しょうぎ）を叩いて、

「一つ頼もう。女房（おかみ）さん、済まないがちょいと借りるぜ。」

「この畳へ来て横におなりな。按摩さん、お客だす、あとを閉めておくんなさい。」

「へい。」

コトコトと杖の音。

「ええ……とんと早や、影法師も同然なもので。」と掠（かす）れ声を白く出して、黒いけんちゅう羊羹色（ようかんいろ）の被布（ひふ）を着た、燈（ともしび）の影は、赤くその皺（しわ）の中へさし込んだが、日和下駄から消えても失（う）せず、片手を泳ぎ、片手で酒の香を嗅分（かぎわ）けるように入った。

「聞えたか。」
とこの門附は、権のあるものいいで、五六本銚子の並んだ、膳をまた傍(わき)へずらす。
「へへへ」とちょっと鼻をすすって、ふん、とけなりそうに香(におい)を嗅(か)ぐ。
「待ちこがれたもんだから、戸外(そと)を犬が走っても、按摩さんに見えたのさ。こう、悪く言うんじゃないぜ……そこへぬっくりと顕(あらわ)れたろう、酔っている、幻かと思った。」
「ほんに待兼ねていなさったえ。あの、笛の音ばかり気にしなさるので、私もどうやら解(よ)めなんだが、やっ

と分ったわな、何んともお待遠でござんしたの。」
「これは、おかみさま、御繁昌（ごはんじょう）。」
「お客はお一人じゃ、ゆっくり療治してあげておくれ。それなりにお寝（よ）ったら、お泊め申そう。」
と言う。
按摩どの、けろりとして、
「ええ、その気で、念入りに一ツ、摑（つかま）りましょうで。」
と我が手を握って、拉（ひし）ぐように、ぐいと揉（も）んだ。
「へい、旦那。」
「旦那じゃねえ。ものもらいだ。」とまた呷（あお）る。
女房が竊（そっ）と睨（にら）んで、

「滅相な、あの、言いなさる。」

十一

「いや、横になるどころじゃない、沢山だ、ここで沢山だよ。……第一背中へ掴(つか)まられて、一呼吸(ひといき)でも応(こた)えられるかどうだか、実はそれさえ覚束(おぼつか)ない。悪くすると、そのまま目を眩(まわ)して打倒(ぶったお)れようも知れんのさ。体(てい)よく按摩さんに掴み殺されるといった形だ。」
　と真顔で言う。
「飛んだ事をおっしゃりませ、田舎でも、これでも、

長年年期を入れました杉山流のものでございます。鳩尾(きゅうび)に鍼(はり)をお打たせになりましても、決して間違いのあるようなものではございませぬ。」と呆(あき)れたように、按摩の剝(む)く目は蒼(あお)かりけり。

「うまい、まずいを言うのじゃない。いつの幾日(いくか)にも何時(なんどき)にも、洒落(しゃれ)にもな、生れてからまだ一度も按摩さんの味を知らないいんだよ。」

「まあ、あんなにあんた、こがれなさった癖に。」

「そりゃ、張って張って仕様がないから、目にちらつくほど待ったがね、いざ……となると初産(ういざん)です、灸(きゅう)の皮切も同じ事さ。どうにも勝手が分らない。痛いんだ

か、痒いんだか、風説に因ると擽ったいとね。多分私も擽ったかろうと思う。……ところがあいにく、母親が操正しく、これでも密夫の児じゃないそうで、その擽ったがりようこの上なし。……あれ、あんなあの、握飯を拵えるような手附をされる、とその手で揉まれるかと思ったばかりで、もう堪らなく擽ったい。どうも、ああ、こりゃ不可え。」

と脇腹へ両肱を、しっかりついて、搔竦むように脊筋を捻る。

「はははは、これはどうも。」と按摩は手持不沙汰な風。

女房更めて顔を覗いて、

「何んと、まあ、可愛らしい。」

「同じ事を、可哀想だ、と言ってくんねえ。……そうかと言って、こう張っちゃ、身も皮も石になって固りそうな、背が詰って胸は裂ける……揉んでもらわなくては遣切れない。遣れ、構わない。」

と激しい声して、片膝を屹と立て、

「殺す気で蒐れ。こっちは覚悟だ、さあ。ときに女房さん、袖摺り合うのも他生の縁ッさ。旅空掛けてこうしたお世話を受けるのも前の世の何かだろう、何んだか、おなごりが惜いんです。摑殺されりゃそれきりだ、

も一つ憚(はばか)りだがついでおくれ、別れの杯になろうも知れん。」

と雫(しずく)を切って、ついと出すと、他愛なさもあんまりな、目の色の変りよう、眦(まなじり)も屹(きっ)となったれば、女房は気を打たれ、黙然(だんまり)でただ目を睜(みは)る。

「さあ按摩さん。」

「ええ、」

「女房(おかみ)さん酌(つ)いどくれよ！」

「はあ、」と酌をする手がちと震えた。

この茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一緒であった。

がたがたと身震いしたが、面（おもて）は幸（さいわい）に紅潮して、
「ああ、腸（はらわた）へ沁透（しみとお）る！」
「何かその、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」と、これもおどつく。
「まず、」
と突張（つッぱ）った手をぐたりと緩めて、
「生命（いのち）に別条は無さそうだ、しかし、しかし応（こた）える。」
とがっくり俯向（うつむ）いたのが、ふらふらした。
「月は寒し、炎のようなその指が、火水となって骨に響く。胸は冷い、耳は熱い。肉（み）は燃える、血は冷える。あっ、」と言って、両手を落した。

吃驚して按摩が手を引く、その嘴や鮹に似たり。

兄哥は、しっかり起直って、

「いや、手をやすめず遣ってくれ、あわれと思って静に……よしんば徐と揉まれた処で、私は五体が砕ける思いだ。

その思いをするのが可厭さに、いろいろに悩んだんだが、避ければ摺着く、過ぎれば引張る、逃げれば追う。形が無ければ声がする……ピイピイ笛は攻太鼓だ。こうひしひしと寄着かれちゃ、弱いものには我慢が出来ない。淵に臨んで、崖の上に瞰下ろして踏留まる胆玉のないものは、いっその思い、真逆に飛込みま

す。破れかぶれよ、按摩さん、従兄弟再従兄弟か、伯父甥か、親類なら、さあ、敵を取れ。私はね、……お仲間の按摩を一人殺しているんだ。」

十二

「今からちょうど三年前。……その年は、この月から一月後の師走の末に、名古屋へ用があって来た。ついでと言っては悪いけれど、稼の繰廻しがどうにか附いて、参宮が出来るというのも、お伊勢様の思召、冥加のほど難有い。ゆっくり古市に逗留して、それ

こそついでに、……浅熊山（あさまやま）の雲も見よう、鼓ケ嶽（たけ）の調（しらべ）も聞こう。二見（ふたみ）じゃ初日を拝んで、堺橋から、池の浦、沖の島で空が別れる、上郡（かみごおり）から志摩へ入って、日和山（ひよりやま）を見物する。……海が凪（な）いだら船を出して、伊良子（いらこ）ケ崎の海鼠（なまこ）で飲もう、何でも五日六日は逗留というつもりで。……山田では尾上町の藤屋へ泊った。驚くべからず――まさかその時は私だって、浴衣に袷（あわせ）じゃ居やしない。

着換えに紋付（もんつき）の一枚も持った、縞（しま）で襲衣（かさね）の若旦那さ。……ま、こう、雲助が傾城買（けいせいがい）の昔を語る……負惜（まけおし）みを言うのじゃないよ。何も自分の働きでそうした訳じゃ

ないのだから。――聞きねえ、親なり、叔父なり、師匠なり、恩人なりという、……私が稼業じゃ江戸で一番、日本中の家元の大黒柱と云う、少兀(すこはげ)の苦い面(つら)した阿父(おやじ)がある。

　いや、その顔色(がんしょく)に似合わない、気さくに巫山戯(ふざけ)た江戸児(えどっこ)でね。行年(ぎょうねん)その時六十歳を、三つと刻んだはおかしいが、数え年のサバを算(よ)んで、私が代理に宿帳をつける時は、天地人とか何んとか言って、禅(ぜん)の問答をするように、指を三本、ひょいと出してギロリと睨(にら)む……五十七歳とかけと云うのさ。可(い)いかね、その気だもの……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、

阿父(おとっ)さんが大の禁句さ。……与一兵衛じゃあるめえし、汝(てめえ)、定九郎(さだくろう)のように呼ぶなえ、と唇を捻曲(ねじま)げて、叔父さんとも言わせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

　この叔父さんのお供だろう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は続く。どこへ行っても女はふらない。師走の山路に、嫁菜が盛りで、しかも大輪(おおりん)が咲いていた。

　とこの桑名、四日市、亀山と、伊勢路へ掛(かか)った汽車の中から、おなじ切符のたれかれが――その催(もよおし)について名古屋へ行った、私たちの、まあ……興行か……その興行の風説(うわさ)をする。嘘にもどうやら、私の評判も

可(よ)さそうな。叔父はもとより。……何事も言うには及ばん。——私が口で饒舌(しゃべ)っては、流儀の恥になろうから、まあ、何某(なにがし)と言ったばかりで、世間は承知すると思って、聞きねえ。

ところがね、その私たちの事を言うついでに、この伊勢へ入ってから、きっと一所に出る、人の名がある。可いかい、山田の古市に惣市(そういち)と云う按摩鍼(あんまはり)だ。」

門附はその名を言う時、うっとりと瞳を据えた。背(せなか)を抱(いだ)くように背後(うしろ)に立った按摩にも、床几(しょうぎ)に近く裾を投げて、向うに腰を掛けた女房にも、目もくれず、凝(じっ)と天井を仰ぎながら、胸前(むなさき)にかかる湯気を忘れたよ

うに手で捌(さば)いて、
「按摩だ、がその按摩が、旧(もと)はさる大名に仕えた士族の果(はて)で、聞きねえ。私等が流儀と、同(おんな)じその道の芸の上手。江戸の宗家も、本山も、当国古市において、一人で兼ねたり、という勢(いきおい)で、自ら宗山(そうざん)と名告(なの)る天狗(てんぐ)。高慢も高慢だが、また出来る事も出来る。……東京の本場から、誰も来て怯(おびや)かされた。某(それがし)も参って拉(ひし)がれた。あれで一眼でも有ろうなら、三重県に居る代物(しろもの)ではない。今度名古屋へ来た連中もそうじゃ、贋物(にせもの)ではなかろうから、何も宗山に稽古をしてもらえとは言わぬけれど、鰻(うなぎ)の他(ほか)に、鯛(たい)がある、味を知って帰れば

可いに。――と才発(さいはじ)けた商人(あきんど)風のと、でっぷりした金の入歯の、土地の物持とも思われる奴の話したのが、風説(うわさ)の中でも耳に付いた。

　叔父はこくこく坐睡(いねむり)をしていたっけ。私(わっし)あ若気だ、襟巻で顔を隠して、睨(にら)むように二人を見たのよ、ね。

　宿の藤屋へ着いてからも、わざと、叔父を一人で湯へ遣り……女中にもちょっと聞く。……挨拶(あいさつ)に出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云う、これこれした芸人が居るか、と聞くと、誰の返事も同じ事。思ったよりは高名で、現に、この頃も藤屋に泊った、何某侯(なにがしこう)の御隠居の御召に因って、上下(かみしも)で座敷を勤(し)た時、(さてもな、

鼓ヶ嶽が近いせいか、これほどの松風は、東京でも聞けぬ、）と御賞美。

（的等（てきら）にも聞かせたい。）と宗山が言われます、とちょろりと饒舌（しゃべ）った。私（わっし）が夥間（なかま）を――（的等。）と言う。的等の一人（いちにん）、かく言う私だ……」

十三

「なお聞けば、古市のはずれに、その惣市、小料理屋の店をして、妾（めかけ）の三人もある、大した勢（いきおい）だ、と言うだろう。――何を！……按摩の分際で、宗家の、宗の

字、この道の、本山が凄じい。
こう、按摩さん、舞台の差は堪忍してくんな。」
と、竊と痛そうに胸を圧えた。
「後で、よく気がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、ほんとの猪はないとて威張る。……な、宮重大根が日本一なら、蕪の千枚漬も皇国無双で、早く言えば、この桑名の、焼蛤も三都無類さ。
その気で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若気の一図に苛々して、第一その宗山が気に入らない。（的等。）もぐっと癪に障れば、妾三人で赫とした。
維新以来の世がわりに、……一時私等の稼業がす

たれて、夥間が食うに困ったと思え。弓矢取っては一万石、大名株の芸人が、イヤ楊枝を削る、かるめら焼を露店で売る。……蕎麦屋の出前持になるのもあり、現在私がその小父者などは、田舎の役場に小使いをして、濁り酒のかすに酔って、田圃の畝に寝たもんです。

……

　その妹だね、可いかい、私の阿母が、振袖の年頃を、困る処へ附込んで、小金を溜めた按摩めが、ちとばかりの貸を枷に、妾にしよう、と追い廻わす。――危く駒下駄を踏返して、駕籠でなくっちゃ見なかった隅田川へ落ちようとしたっさ。――その話にでも嫌いな按

摩が。

ええ。

待て、見えない両眼で、汝(うぬ)が身の程を明(あかる)く見るよう、療治を一つしてくりょう。

で、翌日(あくるひ)は謹んで、参拝した。

その尊さに、その晩ばかりはちっとの酒で宵寝をした、叔父の夜具の裾を叩いて、枕許(まくらもと)へ水を置き、(女中、そこいらへ見物に、)

と言った心は、穴を圧(おさ)えて、宗山を退治る料簡(りょうけん)。

と出た、風が荒い。荒いがこの風、五十鈴川(いすずがわ)で劃(かぎ)られて、宇治橋の向うまでは吹くまいが、相の山の長坂

を下から哄(どっ)と吹上げる……これが悪く生温(なまぬる)くって、灯(あかり)の前じゃ砂が黄色い。月は雲の底に淀(どんよ)りしている。神路山(かみじやま)の樹は蒼(あお)くても、二見の波は白かろう。酷(ひど)い勢(いきおい)、ぱっと吹くので、たじたじとなる。帽子が飛ぶから、そのまま、藤屋が店へ投返した……と脊筋へ孕(はら)んで、坊さんが忍ぶように羽織の袖が飜々(ひらひら)する。着換えるのも面倒で、昼間のなりで、神詣(かみもう)での紋付さ。——袖畳みに懐中(ふところ)へ捻込(ねじこ)んで、何の洒落(しゃれ)にか、手拭で頬被りをしたもんです。

門附になる前兆さ、状(ざま)を見やがれ。」と片手を袖へ、二の腕深く突込(つっこ)んだ。片手で狙(ねら)うように茶碗を圧(おさ)えて、

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに寂然（ひっそり）している。……軒が、がたぴしと鳴って、軒行燈（のきあんどん）がばッばッ揺れる。三味線（さみせん）の音もしたけれど、吹（ふき）さらわれて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶようさ。何の事はない、今夜のこの寂しい新地へ、風を持って来て、打着（ぶッつ）けたと思えば可い。

一軒、地（つち）のちと窪（くぼ）んだ処に、溝板（どぶいた）から直ぐに竹の欄干（てすり）になって、毛氈（もうせん）の端は刎上（はねあが）り、畳に赤い島が出来て、洋燈（ランプ）は油煙に燻（くすぶ）ったが、真白（まっしろ）に塗った姉さんが一人居る、空気銃、吹矢の店へ、ひょろりとして引掛（ひっかか）ったね。

取着（とッつ）きに、肱（ひじ）を支（つ）いて、怪しく正面に眼（まなこ）の光る、悟っ

た顔の達磨様（だるまさま）と、女の顔とを、七分三分に狙いながら、

（この辺に宗山ッて按摩は居るかい。）とここで実は様子を聞く気さ。押懸けて行（ゆ）こうたってちっとも勝手が知れないから。

（先生様かね、いらっしゃります。）と何と、（的等。）の一人に、先生を、しかも、様づけに呼ぶだろう。

（実は、その人の何を、一つ、聞きたくって来たんだが、誰が行っても頼まれてくれるだろうか。）と尋ねると、大熨斗（おおのし）を書いた幕の影から、色の蒼（あお）い、鬢（びん）の乱れた、痩（や）せた中年増（ちゅうどしま）が顔を出して、（知己（ちかづき）のない、旅の方にはどうか知らぬ、お望（のぞみ）なら、内から案内して上げま

しょうか。）と言う。

茶代を奮発（はず）んで、頼むと言った。

（案内して上げなはれ、可（い）い旦那や、気を付けて、）と目配（めくばせ）をする、……と雑作はない、その塗ったのが、いきなり、欄干を跨（また）いで出る奴さ。」

十四

「両袖で口を塞（ふさ）いで、風の中を俯向（うつむ）いて行（ゆ）く。……その女の案内で、つい向う路地を入ると、どこも吹附けるから、戸を鎖（さ）したが、怪しげな行燈（あんどん）の煽（あお）って見える、

ごたごたした両側の長屋の中に、溝板の広い、格子戸造りで、この一軒だけ二階屋。

軒に、御手軽御料理としたのが、宗山先生の住居だった。

（お客様。）と云う女の送りで、ずッと入る。直ぐそこの長火鉢を取巻いて、三人ばかり、変な女が、立膝やら、横坐りやら、猫板に頬杖やら、料理の方は隙らしい。……上框の正面が、取着きの狭い階子段です。

（座敷は二階かい、）と突然頬被を取って上ろうとすると、風立つので燈を置かない。真暗だからちょっと待って、と色めいてざわつき出す。とその拍子に風

のなぐれで、奴等の上の釣洋燈(つりランプ)がぱっと消えた。そこへ、中仕切(なかじきり)の障子が、次の室(ま)の燈(あかり)にほのめいて、二枚見えた。真中(まんなか)へ、ぱっと映ったのが、大坊主の額の出た、唇の大(おお)い影法師。む、宗山め、居るな、と思うと、憎い事には……影法師の、その背中に摑(つか)まって、坊主を揉(も)んでるのが華奢(きゃしゃ)らしい島田髷(まげ)で、この影は、濃く映った。

　火燧(マッチ)々々、と女どもが云う内に、

（えへん）と咳(せきばらい)を太くして、大(おおき)な手で、灰吹を持上げたのが見えて、離れて煙管(きせる)が映る。——もう一倍、その時図体が拡がったのは、袖を開いたらしい。此奴(こいつ)、

寝(ね)ん寝(ね)子(こ)の広袖(どてら)を着ている。
やっと台洋燈を点(つ)けて、
（お待遠でした、さあ、）
って二階へ。 吹矢の店から送って来た女はと、 中段からちょっと見ると、 両膝をずしりと、 そこに居た奴の背後(うしろ)へ火鉢を離れて、 俯向(うつむ)いて坐った。
（あの娘(こ)で可(い)いのかな、 他(ほか)にもござりますよって。）
と六畳の表座敷で低声で言うんだ。 ――ははあ、 商売も大略(あらまし)分った、 と思うと、 其奴(そいつ)が
（お誂(あつらえ)は。）
と大(おおき)な声。

（あっさりしたものでちょっと一口。そこで……）

実は……御主人の按摩さんの、咽喉(のど)が一つ聞きたいのだ、と話した。

（咽喉？）……と其奴がね、異(おつ)に蔑(さげす)んだ笑い方をしたものです。

（先生様の……でござりますか、早速そう申しましょう。）

で、地獄の手曳(てびき)め、急に衣紋繕(えもんづくろ)いをして下りる。しばらくして上って来た年紀(とし)の少(わか)い十六七が、……こりゃどうした、よく言う口だが芥溜(はきだめ)に水仙です、鶴です。帯も襟も唐縮緬(とうちりめん)じゃあるが、もみじのように美し

い。結綿（いいわた）のふっくりしたのに、浅葱鹿（あさぎか）の子の絞高（しぼだか）な手柄を掛けた。やあ、三人あると云う、妾の一人か。おおん神の、お膝許（ひざもと）で沙汰の限りな！　宗山坊主の背中を揉んでた島田髷の影らしい。惜しや、五十鈴川の星と澄んだその目許も、鯰（なまず）の鰭（ひれ）で濁ろう、と可哀（あわれ）に思う。この娘が紫の袱紗（ふくさ）に載（の）せて、薄茶を持って来たんです。

いや、御本山の御見識、その咽喉（のど）を聞きに来たとなると……客にまず袴（はかま）を穿（は）かせる仕向（しむけ）をするな、真剣勝負面白い。で、こっちも勢（いきおい）、懐中（ふところ）から羽織を出して着直したんだね。

やがて、また持出した、杯（さかずき）というのが、朱塗に二

見ヶ浦を金蒔絵（きんまきえ）した、杯台に構えたのは凄（すご）かろう。

（まず一ツ上って、こっちへ。）

と按摩の方から、この杯の指図をする。その工合が、謹んで聞け、といった、頗（すこぶ）る権高なものさ。どかりとそこへ構え込んだ。その容子（ようす）が膝も腹もずんぐりして、胴中（どうなか）ほど咽喉（のど）が太い。耳の傍（わき）から眉間（みけん）へ掛けて、小蛇のように筋が畝（うね）くる。眉が薄く、鼻がひしゃげて、ソレその唇の厚い事、おまけに頬骨がギシと出て、歯を噛（か）むとガチガチと鳴りそう。左の一眼べとりと盲（し）い、右が白眼（しろまなこ）で、ぐるりと飜（かえ）った、しかも一面、念入の黒疱瘡（くろあばた）だ。

が、争われないのは、不具者(かたわ)の相格(そうごう)、肩つきばかりは、みじめらしくしょんぼりして、猪(い)の熊入道もがっくり投首の抜衣紋(ぬきえもん)で居たんだよ。」

十五

「いえな、何も私が意地悪を言うわけではないいえ。」

と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして——傍(かたわら)に柔かな髪の房(ふっさ)りした島田の鬢(びん)を重そうに差俯向(さしうつむ)く……襟足白く冷たそうに、水紅色(ときいろ)の羽二重(はぶたえ)の、無地の長襦袢(ながじゅばん)の肩が辷(すべ)って、寒げに脊筋の抜けるまで、嫋(なよ)やかに、

打悄れた、残んの嫁菜花の薄紫、浅葱のように目に淡い、藤色縮緬の二枚着で、姿の寂しい、二十ばかりの若い芸者を流眄に掛けつつ、

「このお座敷は貰うて上げるから、なあ和女、もうちゃっと内へお去にや。……島家の、あの三重さんやな、和女、お三重さん、お帰り！」

と屹と言う。

「お前さんがおいでやで、ようお客さんの御機嫌を取ってくれるであろうと、小女ばかり附けておいて、私が勝手へ立違うている中や、……勿体ない、お客たちの、お年寄なが気に入らぬか、近頃山田から来た言

うて、こちの私の許(とこ)を見くびったか、酌をせい、と仰有(おっしゃ)っても、浮々(うきうき)とした顔はせず……三味線(さみせん)聞こうとおっしゃれば、鼻の頭(さき)で笑うたげな。傍(そば)に居た喜野が見かねて、私の袖を引きに来た。

先刻(さつき)から、ああ、こうと、口の酸くなるまで、機嫌を取るようにして、私が和女の調子を取って、よしこの一つ上方唄でも、どうぞ三味線の音(ね)をさしておくれ。お客様がお寂しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、蠟燭(ろうそく)の灯も白けると、頼むようにして聞かいても、知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は和女、禁物か。下手や言うて、知らぬ云うて、曲(まがり)なりにもお座つき一つ

弾けぬ芸妓（げいこ）がどこにある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、そでないか。貴客（あなた）がたのお人柄を見りゃ分るに、何で和女、勤める気や。私が済まぬ。さ、お立ち。ええ、私が箱を下げてやるから。」

と優しいのがツンと立って、襖際（ふすまぎわ）に横にした三味線を邪険に取って、衝（つ）と縦様（たてざま）に引立てる。

「ああれ。」

はっと裳（もすそ）を摺（す）らして、取縋（とりすが）るように、女中の膝を竊（そっ）と抱き、袖を引き、三味線を引留めた。お三重の姿は崩るごとく、芍薬（しゃくやく）の花の散るに似て、

「堪忍して下さいまし、堪忍して、堪忍して、」と、呼吸（いき）の切れる声が湿（うる）んで、

「お客様にも、このお内へも、な、何で私が失礼しましょう。ほんとに、あの、ほんとに三味線は出来ませんもの、姉さん、」

と言（ことば）が途絶えた。……

「今しがたも、な、他家（よそ）のお座敷、隅の方に坐っていました。不断ではない、兵隊さんの送別会、大陽気に騒ぐのに、芸のないものは置かん、衣服（きもの）を脱いで踊るんなら可（よし）、可厭（いや）なら下げると……私一人帰されて、主人の家（うち）へ戻りますと、直ぐに酷（ひど）いめに逢いました、え。

三味線も弾けず、踊りも出来ぬ、座敷で衣物(きもの)が脱げないなら、内で脱げ、引剥(ひっぱ)ぐと、な、帯も何も取られた上、台所で突伏(つっぷ)せられて、引窓をわざと開けた、寒いお月様のさす影で、恥かしいなぁ、柄杓(ひしゃく)で水を立続けて乳へも胸へもかけられましたの。

こちらから、あの、お座敷を掛けて下さいますと、どうでしょう、炬燵(こたつ)で温(あたた)めた襦袢(じゅばん)を着せて、東京のお客じゃそうなと、な、取って置きの着物を出して、よう勤めて帰れや言うて、御主人が手で、駒下駄まで出すんです。

勤めるたって、どうしましょう……踊は立って歩行(ある)

くとも出来ませんし、三味線は、それが姉さん、手を当てれば誰にだって、音のせぬ事はないけれど、弾いて聞かせとおっしゃるもの、どうして私唄えます。……

不具（かたわ）でもないに情（なさけ）ない。調子が自分で出来ません。何をどうして、お座敷へ置いて頂けようと思いますと、気が怯（ひ）けて気が怯けて、口も満足利けませんから、何が気に入らないで、失礼な顔をすると、お思い遊ばすのも無理はない、なあ。……

このお家へは、お台所で、洗い物のお手伝をいたします。姉さん、え、姉さん。」

と袖を擦(さす)って、一生懸命、うるんだ目許(めもと)を見得もなく、仰向(あおむ)けになって女中の顔。……色が見る見る柔(やわら)いで、突いて立った三味線の棹(さお)も撓(たわ)みそうになった、と見ると、二人の客へ、向直った、ふっくりとある綾(あや)の帯の結目(むすびめ)で、なおその女中の袂(たもと)を圧(おさ)えて。……

十六

お三重は、そして、更(あらた)めて二箇(ふたり)の老人に手を支(つ)いた。

「芸者でお呼び遊ばした、と思いますと……お役に立たず、極(きま)りが悪うございまして、お銚子(ちょうし)を持ちますに

も手が震えてなりません。下婢（おさん）をお傍（そば）へお置き遊ばしたとお思いなさいまして、お休みになりますまでお使いなすって下さいまし。お背中を敲（たた）きましょう、な、どうぞな、お肩を揉（も）まして下さいまし。それなら一生懸命にきっと精を出します。」

と惜気（おしげ）もなく、前髪を畳につくまで平伏（ひれふ）した。三指づきの折かがみが、こんな中でも、打上る。

本を開いて、道中の絵をじろじろと黙って見ていた捻平が、重くるしい口を開けて、

「子孫末代よい意見じゃ、旅で芸者を呼ぶなぞは、のう、お互に以後謹もう……」と火箸に手を置く。

所在なさそうに半眼で、正面（まとも）に臨風榜可小楼（りんぷうぼうかしょうろう）を仰ぎながら、程を忘れた巻莨（まきたばこ）、この時、口許へ火を吸って、慌てて灰へ抛（ほう）って、弥次郎兵衛は一つ咽（む）せた。

「ええ、いや、女中、……追って祝儀はする。ここでと思うが、その娘（こ）が気が詰（つま）ろうから、どこか小座敷へ休まして皆（みんな）で饂飩でも食べてくれ。私が驕（おご）る。で、何か面白い話をして遊ばして、やがて可（い）い時分に帰すが可い。」と冷くなった猪口（ちょこ）を取って、寂しそうに衝（つ）と飲んだ。

女中は、これよりさき、支（つ）いて突立（つッた）ったその三味線を、次の室（ま）の暗い方へ密（そっ）と押遣（おしや）って、がっくりと筋が

萎（な）えた風に、折重なるまで摺寄（すりよ）りながら、黙然（だんま）りで、燈（ともしび）の影に水のごとく打揺（うちゆら）ぐ、お三重の背中を擦（さす）っていた。

「島屋の亭が、そんな酷（ひど）い事をしおるかえ。可いわ、内の御隠居にそう言うて、沙汰をして上げよう。心安う思うておいで、ほんにまあ、よう和女（あんた）、顔へ疵（きず）もつけんの。」

と、かよわい腕（かいな）を撫下（なでお）ろす。

「ああ、それも売物じゃいうだけの斟酌（しんしゃく）に違いないな。……お客様に礼言いや。さ、そして、何かを話しがてら、御隠居の炬燵（こたつ）へおいで。切下髪（きりさげがみ）に頭巾（ずきん）被（かぶ）って、ちょ

うどな、羊羹切って、茶を食べてや。けども、」

とお三重の、その清らかな襟許から、優しい鬢毛を差覗くように、右瞻左瞻て、

「和女、因果やな、ほんとに、三味線は弾けぬかい。ペンともシャンとも。」

で、わざと慰めるように吻々と笑った。

人の情に溶けたと見える……氷る涙の玉を散らして、はっと泣いた声の下で、

「はい、願掛けをしましても、塩断ちまでしましたけれど、どうしても分りません、調子が一つ出来ません。

性来（うまれつき）でござんしょう。」

師走の闇夜（やみよ）に白梅（しらうめ）の、面（おもて）を蝋（ろう）に照らされる。

「踊もかい。」

「は……い、」

「泣くな、弱虫、さあ一つ飲まんか！　元気をつけて。向後どこへか呼ばれた時は、怯（おび）えるなよ。気の持ちようでどうにもなる。ジャカジャカと引鳴らせ、糸瓜（へちま）の皮で掻廻すだ。琴（こと）も胡弓（こきゅう）も用はない。銅鑼鐃鈸（どらにょうはち）を叩けさ。簫（しょう）の笛をピイと遣れ、上手下手は誰にも分らぬ。それなら芸なしとは言われまい。踊が出来ずば体操だ。一、」

と左右へ、羽織の紐の断れるばかり大手を拡げ、寛闊な胸を反らすと、

「二よ。」と、庄屋殿が鉄砲二つ、ぬいと前へ突出いて、励ますごとく呵々と弥次郎兵衛、

「これ、その位な事は出来よう。いや、それも度胸だな。見た処、そのように気が弱くては、いかな事も遣つけられまい、可哀相に。」と声が掠れる。

「あの……私が、自分から、言います事は出来ません、お恥しいのでございますが、舞の真似が少しばかり立てますの、それもただ一ツだけ。」

と云う顔を俯向いて、恥かしそうにまた手を支く。

「舞えるかえ、舞えるのかえ。」
と女中は嬉しそうな声をして、
「おお、踊や言うで明かんのじゃ。舞えるのなら立っておくれ。このお座敷、遠慮は入(い)らん。待ちなはれ、地が要ろう。これ喜野、あすこの広間へ行ってな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」
とぽんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、名告(なの)ったお千が、打傾いて、優しく口許をちょいと曲げて傾いて、
「待って、待って、」

十七

「いつもと違う。……一度軍隊へ行きなさると、日曜でのうては出られぬ、……お国のためやで、馴(な)れぬ苦労もしなさんす。新兵さんの送別会や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。
　可いわ、旅の恥は掻棄てを反対(あべこべ)なが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を掻廻そう。お三重さん、立つのは何？　有るものか、無いものか言うも行過ぎた……有るものとて無いけれど、どうにか間に合わせたい

ものではある。」
「あら、姉さん。」
と、三味線取りに立とうとした、お千の膝を、袖で圧（おさ）えて、ちとはなじろんだ、お三重の愛嬌（あいきょう）。
「糸に合うなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の真似なんです。」と、言いも果てず、お千の膝に顔を隠して、小父者（おじご）と捻平に背向（そがい）になった初々しさ。包ましやかな姿ながら、身を揉（も）む姿の着崩れして、袖を離れて畳に長い、襦袢の袖は媚（なまめ）かしい。
「何、その舞を舞うのかい。」と弥次郎兵衛は一言云う。
捻平膝の本をばったり伏せて、

「さて、飲もう。手酌でよし。ここで舞なぞは願い下げじゃ。せめてお題目の太鼓にさっしゃい。ふぁははは、」となぜか皺枯（しわが）れた高笑い、この時ばかり天井に哄（どっ）と響いた。

「捻平さん、捻さん。」

「おお。」

と不性（ぶしょう）げにやっと応（こた）える。

「何も道中の話の種じゃ、ちょっと見物をしようと思うね。」

「まず、ご免じゃ。」

「さらば、其許（そのもと）は目を瞑（ねむ）るだ。」

「ええ、縁起の悪い事を言わさる。……明日にも江戸へ帰って、可愛い孫娘の顔を見るまでは、死んでもなかなか目は瞑(ねむ)らぬ。」

「さてさて捻(ねじ)るわ、ソレそこが捻平さね。勝手になされ。さあ、あの娘(こ)立ったり、この爺様(じいさま)に遠慮は入らぬぞ。それ、何にも芸がないと云うて肩腰をさすろうと卑下をする。どんな真似でも一つ遣れば、立派な芸者の面目(めんぼく)が立つ。祝儀取るにも心持が可(よ)かろうから、是非見たい。が、しかし心のままにしなよ、決して勤(つとめ)を強いるじゃないぞ。」

「あんなに仰有(おっしゃ)って下さるもの。さあ、どんな事する

のや知らんが、まずうても大事ない、大事ない、それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

とわずかに身を起すと、紫の襟を噛(か)むように——ふっくりしたのが、あわれに窶(やつ)れた——頤(おとがい)深く、恥かしそうに、内懐(うちぶところ)を覗(のぞ)いたが、膚身(はだみ)に着けたと思わるる、……胸やや白き衣紋(えもん)を透かして、濃い紫の細い包、袱紗(ふくさ)の縮緬(ちりめん)が飜然(ひらり)と飜(かえ)ると、燭台に照って、颯(さっ)と輝く、銀の地の、ああ、白魚(しらうお)の指に重そうな、一本の舞扇。

晃然(きらり)とあるのを押頂くよう、前髪を掛けて、扇をそ

の、玉簪のごとく額に当てたを、そのまま折目高にきりきりと、月の出汐の波の影、静に照々と開くとともに、顔を隠して、反らした指のみ、両方親骨にちらりと白い。

また川口の汐加減、隣の広間の人動揺めきが颯と退く。

と見れば皎然たる銀の地に、黄金の雲を散らして、紺青の月、ただ一輪を描いたる、扇の影に声澄みて、

「——その時あま人申様、もしこのたまを取得たらば、この御子を世継の御位になしたまえと申しかば、子細あらじと領承したもう、さて我子

ゆえに捨ん命、露ほども惜（おし）からじと、千尋（ちひろ）のなわを腰につけ、もしこの玉をとり得たらば、このなわを動かすべし、その時人々ちからをそえ――」

と調子が緊（しま）って、

「……ひきあげたまえと約束し、一（ひとつ）の利剣を抜持って、」

と扇をきりりと袖を直す、と手練（てだれ）ぞ見ゆる、自（おのず）から、衣紋の位に年長（た）けて、瞳を定めたその顔（かんばせ）。硝子（がらす）戸越に月さして、霜の川浪照添（てりそ）う俤（おもかげ）。膝立据（たてす）えた畳にも、燭台（しょくだい）の花颯と流るる。

「ああ、待てい。」

と捻平、力の籠（こも）った声を掛けた。

十八

で、火鉢をずっと傍（そば）へ引いて、

「女中、もちっとこれへ火をおくれ。いや、立つに及ばん。その、鉄瓶をはずせば可（よ）し。」と捻平がいいつける。

この場合なり、何となく、お千も起居（たちい）に身体（からだ）が緊（しま）った。

静（しずか）に炭火を移させながら、捻平は膝をずらすと、

革鞄（かばん）などは次の室（ま）へ……それだけ床の間に差置いた……車の上でも頸（うなじ）に掛けた風呂敷包を、重いもののように両手で柔（やわら）かに取って、膝の上へ据えながら、お千の顔を除（よ）けて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつつ、

「ああ、これ、お三重さんとか言うの、そのお娘（こ）、手を上げられい。さ、手を上げて、」

と言う。……お三重は利剣で立とうとしたのを、慌（あわただ）しく捻平に留められたので、この時まで、差開いたその舞扇が、唇の花に霞むまで、俯向（うつむ）いた顔をひたと額につけて、片手を畳に支（つ）いていた。こう捻平に声懸けられて、わずかに顔を振上げながら、きりきりと

一まず閉じると、その扇を畳むに連れて、今まで、濶（かっ）と瞳を張って見据えていた眼（まなこ）を、次第に塞（ふさ）いだ弥次郎兵衛は、ものも言わず、火鉢のふちに、ぶるぶると震う指を、と支えた態（なり）の、巻莨（まきたばこ）から、音もしないで、ほろほろと灰がこぼれる。

　捻平座蒲団（さぶとん）を一膝（ひとひざ）出て、

「いや、更（あら）めて、熟（とく）と、見せてもらおうじゃが、まずこっちへ寄らしゃれ。ええ、今の謡（うたい）の、気組みと、その形（かた）。教えも教えた、さて、習いも習うたの。

　こうまでこれを教うるものは、四国の果（はて）にも他（ほか）にはあるまい。あらかた人は分ったが、それとなく音信（たより）も

聞きたい。の、其許（そこ）も黙って聞かっしゃい。」
と弥次が方（かた）に、捻平目遣（めづか）いを一つして、
「まず、どうして、誰から、御身（おみ）は習うたの。」
「はい、」
と弱々と返事した。お三重はもう、他愛（たわい）なく娘になって、ほろりとして、
「あの、前刻（さっき）も申しましたように、不器用も通越した、調子はずれ、その上覚えが悪うござんして、長唄の宵や待ちの三味線（さみせん）のテンもツンも分りません。この間まで居（お）りました、山田の新町の姉さんが、朝と昼と、手隙（てすき）な時は晩方も、日に三度ずつも、あの噛（か）んで含め

て、胸を割って刻込むように教えて下すったんでございますけれど、自分でも悲しい。……暁の、とだけ十日かかって、やっと真似だけ弾けますと、夢になってもう手が違い、心では思いながら、三の手が一へ滑（すべ）って、とぼけたような音（ね）がします。

撥（ばち）で咽喉（のど）を引裂かれ、煙管（きせる）で胸を打たれたのも、糸を切った数より多い。

それも何も、邪険でするのではないのです。……私が、な、まだその前に、鳥羽（とば）の廓（くるわ）に居ました時、……」

「ああ、お前さんは、鳥羽のものかい、志摩だな。」

と弥次郎兵衛がフト聞入れた。

「いえ、私はな、やっぱりお伊勢なんですけれど、父(おとっ)さんが死(な)くなりましてから、継母(ままはは)に売られて行きましたの。はじめに聞いた奉公とは嘘のように違います。

――お客の言うことを聞かぬ言うて、陸(おか)で悪くば海で稼げって、崕(がけ)の下の船着(ふなつき)から、夜になると、男衆に捉(つかま)えられて、小船に積まれて海へ出て、月があっても、島の蔭の暗い処を、危いなあ、ひやひやする、木の葉のように浮いて歩行(ある)いて、寂(しん)とした海の上で……悲しい唄を唄います。そしてお客の取れぬ時は、船頭衆の胸に響いて、女が恋しゅうなる禁厭(まじない)じゃ、お茶挽(ちゃひ)いた罰、と云って、船から海へ、びしゃびしゃと追下ろし

て、汐《しお》の干た巌《いわ》へ上げて、巌の裂目へ俯向《うつむ》けに口をつけさして、（こいし、こいし。）と呼ばせます。若い衆は舳《へさき》に待ってて、声が切れると、栄螺《さざえ》の殻をぴしぴしと打着《ぶッつ》けますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの。……私のそれは、師走から、寒の中《うち》で、八百八島《やしま》あると言う、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巌の角は針のような、あの、その上で、（こいし、こいし。）って、唇の、しびれるばかり泣いている。咽喉《のど》は裂け、舌は凍って、潮《しお》を浴びた裙《すそ》から冷え通って、正体がなくなる処を、貝殻で引掻《ひっか》かれて、やっと船で正気が付くのは、灯《あかり》もない、何の船やら、あの、まあ、

鬼の支（つ）いた棒見るような帆柱の下から、皮の硬（こわ）い大（おおき）な手が出て、引摑（ひッつか）んで抱込みます。

空には蒼（あお）い星ばかり、海の水は皆黒い。暗（やみ）の夜の血の池に落ちたようで、ああ、生きているか……千鳥も鳴く、私も泣く。……お恥かしゅうござんす。」

と翳（かざ）す扇の利剣に添えて、水のような袖をあて、顔を隠したその風情。人は声なくして、ただ、ちりちりと、蠟燭（ろうそく）の涙（なんだ）白く散る。

この物語を聞く人々、いかに日和山の頂より、志摩の島々、海の凪（なぎ）、霞の池に鶴の舞う、あの、麗朗（うららか）なる景色を見たるか。

十九

「泣いてばかりいますから、気の荒いお船頭が、こんな泣虫を買うほどなら、伊良子崎の海鼠（なまこ）を蒲団（ふとん）で、弥島（やしま）の烏賊（いか）を遊ぶって、どの船からも投出される。

また、あの巌（いわ）に追上げられて、霜風の間々（あいあい）に、（こいし、こいし。）と泣くのでござんす。

手足は凍って貝になっても、（こいし）と泣くのが本望な。巌の裂目を沖へ通って、海の果（はて）まで響いて欲しい。もう船も去（い）ね、潮も来い。……そのままで石に

なってしまいたいと思うほど、お客様、私は、あの、」

と乱れた襦袢の袖を銜えた、水紅色映る瞼のあたり、ほんのりと薄くして、

「心でばかり長い事、思っておりまする人があって。……芸も容色もないものが、生意気を云うようですが、……たとい殺されても、死んでもと、心願掛けておりました。

ある晩も、やっぱり蒼い灯の船に買われて、その船頭衆の言う事を肯かなかったので、こっちの船へ突返されると、艫の処に行火を跨いで、どぶろくを飲んでいた、私を送りの若い衆がな、玉代だけ損をしやはれ、

此方衆(こなたしゅう)の見る前で、この女を、海士(あま)にして慰もうと、月の良い晩でした。

胴の間で着物を脱がして、膚(はだ)の紐へなわを付けて、倒(さかさま)に海の深みへ沈めます。ずんずんずんと沈んでな、もう奈落かと思う時、釣瓶(つるべ)のようにきりきりと、身体(からだ)を車に引上げて、髪の雫(しずく)も切らせずに、また海へ突込(つっこ)みました。

この時な、その繋(かか)り船に、長崎辺の伯父が一人乗込んでいると云うて、お小遣(こづかい)の無心に来て、泊込んでおりました、二見から鳥羽がよいの馬車に、馭者(ぎょしゃ)をします、寒中、襯衣(しゃつ)一枚に袴服(ずぼん)を穿(は)いた若い人が、私のそ

んなにされるのが、あんまり可哀相な、とそう云うて、伊勢へ帰って、その話をしましたので、今、あの申しました。……

この間までおりました、古市の新地（しんまち）の姉さんが、随分なお金子（かね）を出して、私を連れ出してくれましたの。

それでな、鳥羽の鬼へも面当（つらあて）に、芸をよく覚えて、立派な芸子になれやッて、姉さんが、そうやって、目に涙を一杯ためて、ぴしぴし撥（ばち）で打（ぶ）ちながら、三味線を教えてくれるんですが、どうした因果か、ちっとも覚えられません。

人さしと、中指と、ちょっとの間を、一日に三度ず

つ、一週間も鳴らしますから、近所隣も迷惑して、御飯もまずいと言うのですえ。

また月の良い晩でした。ああ、今の御主人が、親切なだけなお辛い。……何の、身体（からだ）の切ない、苦しいだけは、生命（いのち）が絶えればそれで済む。いっそまた鳥羽へ行って、あの巌（いわ）に摑（つか）まって、（こいし、こいし、）と泣こうか知らぬ、膚の紐になわつけて、海へ入れられるが気安いような、と島も海も目に見えて、ふらふらと月の中を、千鳥が、冥土（めいど）の使いに来て、連れて行かれそうに思いました。……格子前（さき）へ流しが来ました。

新町の月影に、露の垂りそうな、あの、ちらちら光

る撥音で、

……博多帯しめ、筑前絞り——

と、何とも言えぬ好い声で。

(へい、不調法、お喧しゅう、)って、そのまま行きそうにしたのです。

(ああ、身震がするほど上手い、あやかるように拝んで来な、それ、お賽銭をあげる気で。)

と滝縞お召の半纏着て、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてやった姉さんが、長火鉢の抽斗からお宝を出して、キイと、あの繻子が鳴る、帯へ挿んだ懐紙に捻って、私に持たせなすったのを、盆に乗せて、戸を

開けると、もう一二間（けん）行きなさいます。二人の間にある月をな、影で繋（つな）いで、ちゃっと行って、（是喃（こいし）。）と呼んで、出した盆を、振向いてお取りでした。私や、思わずその手に縋（すが）って、涙がひとりでに出ましたえ。男で居ながら、こんなにも上手な方があるものを、切（せ）めてその指一本でも、私の身体（からだ）についたらばと、つい、おろおろと泣いたのです。

頬被（ほおかむり）をしていなすった。あのその、私の手を取ったまま——黙って、少し脇の方へ退（の）いた処で、（何を泣く。）って優しい声で、その門附が聞いてくれます。もう恥も何も忘れてな、その、あの、どうしても三味線

の覚えられぬ事を話しました。」

二十

「よく聞いて、しばらく熟(じっ)と顔を見ていなさいました。

(芸事の出来るように、神へ願懸(がんがけ)をすると云って、夜の明けぬ内、外へ出ろ。鼓ヶ嶽の裾にある、雑樹林の中へ来い。三日とも思うけれど、主人には、七日と頼んで。すぐ、今夜の明方から。……分ったか。若い女の途中が危(あぶな)い、この入口まで来て待ってやる、化(ばか)されると思うな、夢ではない。……)

とお言いのなり、三味線を胸に附着(くッつ)けて、フイと暗がりへ附着いて、黒塀を去(い)きなさいます。……

その事は言わぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離(こり)取って、願懸けすると頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。

殺されたら死ぬ気でな、——大恩のある御主人の、この格子戸も見納めか、と思うようで、軒下へ出て振返って、門(かど)を視(なが)めて、立っているとな。

（おいで、）

と云って、突然(いきなり)、背後(うしろ)から手を取りなすった、門附のそのお方。

私はな、よう覚悟はしていたが、天狗様に攫(さら)われるかと思いましたえ。

あとは夢やら現(うつつ)やら。明方内へ帰ってからも、その後(あと)は二日も三日もただ茫(ぼう)としておりましたの。……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流(ながれ)の音と聞えます、雑木の森の暗い中で、その方に教わりました。……舞も、あの、さす手も、ひく手も、ただ背後(うしろ)から背中を抱いて下さいますと、私の身体(からだ)が、舞いました。それだけより存じません。

もっとも、私が、あの、鳥羽の海へ投入れられた、その身の上も話しました。その方は不思議な事で、私

とは敵(かたき)のような中だ事も、いろいろ入組んではおりますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言うな、と口留めをされました。何んにも話がなりません。五日目に、もう可いから、これを舞って座敷をせい。芸なし、とは言うまい、ツて、お記念(かたみ)なり、しるしなりに、この舞扇を下さいました。」

と袖で胸へしっかと抱いて、ぶるぶると肩を震わした、後毛(おくれげ)がはらりとなる。

捻平溜息(ためいき)をして頷(うなず)き、

「いや、よく分った。教え方も、習い方も、話されずとよく分った。時に、山田に居て、どうじゃな、その

舞だけでは勤まらなんだか。」
「はい、はじめて謡いました時は、皆が、わっと笑うやら、中には恐い怖いと云う人もござんす。なぜ言うと、五日ばかり、あの私がな、天狗様に誘い出された、と風説したのでござんすから。」
「は、いかにも師匠が魔でなくては、その立方は習われぬわ。むむ、で、何かの、伊勢にも謡うたうものの、五人七人はあろうと思うが、その連中には見せなんだか。」
「ええ、物好に試すって、呼んだ方もありましたが、地をお謡いなさる方が、何じゃやら、ちっとも、もの

にならぬと言って、すぐにお留(や)めなさいましたの。」

「ははあ、いや、その足拍子を入れられては、やわな謡(うたい)は断(ちぎ)れて飛ぶじゃよ。はははは、唸(うな)る連中粉灰(こっぱい)じゃて。かたがたこの桑名へ、住替えとやらしたのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠(ほ)えて飛ぶ処は、梟(ふくろ)の憑物(つきもの)がしよった、と皆気違(きちがい)にしなさいます。姉さんも、手放すのは可哀相や言って下さいましたけれど、……周囲(まわり)の人が承知しませず、……この桑名の島屋とは、行(ゆき)かいはせぬ遠い中でも、姉さんの縁続きでござんすから、預けるつもりで寄越(よこ)されましたの。」

「おお、そこで、また辛い思をさせられるか。まずまず、それは後でゆっくり聞こう。……そのお娘、私も同一じゃ。天魔でなくて、若い女が、術をするわと、仰天したので、手を留めて済まなんだ。さあ、立直して舞うて下さい。大儀じゃろうが一さし頼む。私も久ぶりで可懐しい、御身の姿で、若師匠の御意を得よう。」

と言の中に、膝で解く、その風呂敷の中を見よ。土佐の名手が画いたような、紅い調は立田川、月の裏皮、表皮。玉の砧を、打つや、うつつに、天人も聞けかしとて、雲井、と銘ある秘蔵の塗胴。老の手捌き美しく、

錦に梭を、投ぐるよう、さらさらと緒を緊めて、火鉢の火に高く翳す、と……呼吸をのんで驚いたように見ていたお千は、思わず、はっと両手を支いた。

芸の威厳は争われず、この捻平を誰とかする、七十八歳の翁、辺見秀之進。近頃孫に代を譲って、雪叟とて隠居した、小鼓取って、本朝無双の名人である。

いざや、小父者は能役者、当流第一の老手、恩地源三郎、すなわちこれ。

この二人は、侯爵津の守が、参宮の、仮の館に催された、一調の番組を勤め済まして、あとを膝栗毛で帰る途中であった。

二十一

さて、饂飩屋では門附の兄哥が語り次ぐ。

「いや、それから、いろいろ勿体つける所作があって、やがて大坊主が謡出した。

聞くと、どうして、思ったより出来ている、按摩鍼の芸ではない。……戸外をどッどと吹く風の中へ、この声を打撒けたら、あのピイピイ笛ぐらいに纏まろうというもんです。成程、随分夥間には、此奴に(的等。)扱いにされようというのが少くない。

が、私に取っちゃ小敵（しょうてき）だった。けれども芸は大事です、侮（あなど）るまい、と気を緊（し）めて、そこで、膝を。」

と坐直（すわりなお）ると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋（えもん）が緊（しま）る。

「……この膝を丁（ちょう）と叩いて、黙って二ツ三ツ拍子を取ると、この拍子が尋常（ただ）んじゃない。……親なり師匠の叔父きの膝に、小児（こども）の時から、抱かれて習った相伝だ。対手（あいて）の節の隙間を切って、伸縮（のびちぢ）みを緊（し）めつ、緩めつ、声の重味を刎上（はねあ）げて、咽喉（のど）の呼吸を突崩す。寸法を知らず、間拍子の分らない、まんざらの素人は、盲目聾（めくらつんぼ）で気にはしないが、ちと商売人の端くれで、い

ささか心得のある対手（あいて）だと、トンと一つ打たれただけで、もう声が引掛（ひっかか）って、節が不状（ぶざま）に蹴躓（けつまず）く。三味線の間（あい）も同一（おんなじ）だ。どうです、意気なお方に釣合わぬ……ン、と一ツ刎（は）ねないと、野暮な矢の字が、とうふにかすがい、糠（ぬか）に釘でぐしゃりとならあね。

　さすがに心得のある奴だけ、商売人にぴたりと一ツ、拍子で声を押伏（おっぷ）せられると、張った調子が直ぐにたるんだ。思えば余計な若気の過失（あやまち）、こっちは畜生の浅猿（あさま）しさだが、対手（あいて）は素人の悲しさだ。

　あわれや宗山。見る内に、額にたらたらと衝（つ）と汗を流し、死声（しにごえ）を振絞ると、頤（あご）から胸へ膏（あぶら）を絞った……あ

のその大きな唇が海鼠を干したように乾いて来て、舌が硬って呼吸が発奮む。わなわなと震える手で、畳を掴むように、うたいながら猪口を拾おうとする処、ものの本をまだ一枚とうたわぬ前、ピシリとそこへ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、ドン底から節が抜けたものらしい。

はっと火のような呼吸を吐く、トタンに真俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のように畳を嘗めた。

（先生、御病気か。）

って私あ莞爾したんだ。

（是非聞きたい、平にどうか。宗山、この上に聾に

なっても、貴下（あなた）のを一番、聞かずには死なれぬ。）

と拳（こぶし）を握って、せいせい言ってる。

（按摩さん。）

と私は呼んで、

（尾上町の藤屋まで、どのくらい離れている。）

（何んで、）

と聞く。

（間によっては声が響く。内証で来たんだ。……藤屋には私の声が聞かしたくない、叔父が一人寝てござるんだ。勇士は霜の気勢（けはい）を知るとさ――たださえ目敏（めざと）い老人（としより）が、この風だから寝苦しがって、フト起きてでも

いるとならない、祝儀は置いた。帰るぜ。）

ト宗山が、凝と塞いだ目を、ぐるぐると動かして、

（暫く、今の拍子を打ちなされ……古市から尾上町まで声が聞えようか、と言いなされる、御大言、年のお少さ。まだ一度も声は聞かず、顔はもとより見た事もなけれども……当流の大師匠、恩地源三郎どの養子と聞く……同じ喜多八氏の外にはあるまい。さようでござろう、恩地、）

と私の名をちゃんと言う。

ああ、酔った、」

と杯をばたりと落した。

「饒舌（しゃべ）って悪い私の名じゃない。叔父に済まない。二人とも、誰にも言うな。……」

と鷹揚（おうよう）で、按摩と女房に目をあしらい。

「私は羽織の裾を払って、

（違ったような、当ったようだ、が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の山、宗山か。若布（わかめ）の附焼でも土産に持って、東海道を這（は）い上れ。恩地の台所から音信（おとず）れたら、叔父には内証で、居候の腕白が、独楽（こま）を廻す片手間に、この浦船でも教えてやろう。）

とずっと立つ。

二十二

「痘瘡（あばた）の中に白眼（しろまなこ）を剝（む）いて、よたよたと立上って、憤（いきどお）った声ながら、

（可懐（なつかし）いわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。触らせて下され、つかまらせて下され、一撫（ひとな）で、撫でさせて下され。）

と言う。

いや、撫られて堪（たま）りますか。

摺抜（すりぬ）けようとするんだがね、六畳の狭い座敷、盲目（めくら）でも自分の家（うち）だ。

素早く、階子段（はしごだん）の降口を塞（ふさ）いで、むずと、大手を拡げたろう。……影が天井へ懸（かか）って、充満（いっぱい）の黒坊主が、汗膏（あせあぶら）を流して撫じょうとする。

いや、その嫉妬執着（しっとしゅうちゃく）の、険な不思議の形相が、今もって忘れられない。

（可厭（いや）だ、可厭だ、可厭だ。）と、こっちは夢中に出ようとする、よける、留める、行違うで、やわな、かぐら堂の二階中みしみしと鳴る。風は轟々（ごうごう）と当る。ただ黒雲に捲（ま）かれたようで、可恐（おそろ）しくなった、凄（すご）さは凄し。

衝（つ）と、引潜（ひっくぐ）って、ドンと飛び摺りに、どどどと駈（か）け下りると、ね。

（袖（そで）や、止めませい。）

と宗山が二階で喚（わめ）いた。皺枯声（しわがれごえ）が、風でぱっと耳に当ると、三四人立騒ぐ女の中から、すっと美しく姿を抜いて、格子を開けた門口（かどぐち）で、しっかり摑（つか）まる。吹きつけて揉（も）む風で、颯（さっ）と紅（あか）い褄（つま）が搦（から）むように、私に縋（すが）ったのが、結綿（ゆいわた）の、その娘です。

背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の妾（めかけ）だろう。

ものを言う清（すず）しい、張（はり）のある目を上から見込んで、構うものか、行きがけだ。

（可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の

玩弄物にされるな。）
　と言捨てに突放す。
（あれ。）と云う声がうしろへ、ぱっと吹飛ばされる風に向って、砂塵の中へ、や、躍込むようにして一散に駈けて返った。
　後に知った、が、妾じゃない。お袖と云うその可愛いのは、宗山の娘だったね。それを娘と知っていたら、いや、その時だって気が付いたら、按摩が親の仇敵でも、私あ退治るんじゃなかったんだ。」
　と不意にがッくりと胸を折って俯向くと、按摩の手が、肩を辷って、ぬいと越す。……その袖の陰で、取

るともなく、落した杯を探りながら、
「もしか、按摩が尋ねて来たら、堅く居らん、と言え、と宿のものへ吩附けた。叔父のすやすやは、上首尾で、並べて取った床の中へ、すっぽり入って、引被って、可心持に寝たんだが。

ああ、寝心の好い思いをしたのは、その晩きりさ。

なぜッて、宗山がその夜の中に、私に辱められたのを口惜しがって、傲慢な奴だけに、ぴしりと、もろい折方、憤死してしまったんだ。七代まで流儀に祟る、と手探りでにじり書した遺書を残してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だった。あの広場の雑樹へ下って、夜が明

けて、ヤッと小止（こやみ）になった風に、ふらふらとまだ動いていたとさ。

　こっちは何にも知らなかろう、風は凪（な）ぐ、天気は可（よし）。叔父は一段の上機嫌。……古市を立って二見へ行った。朝の中（うち）、朝日館と云うのへ入って、いずれ泊る、……先へ鳥羽へ行って、ゆっくりしようと、直ぐに車で、上の山から、日の出の下、二見の浦の上を通って、日和山を桟敷（さじき）に、山の上に、海を青畳（あおだたみ）にして二人で半日。やがて朝日館へ帰る、……とどうだ。

　旅籠（はたご）の表は黒山の人だかりで、内の廊下もごった返す。大袈裟（おおげさ）な事を言うんじゃない。伊勢から私たちに

逢いに来たのだ。按摩の変事と遺書（かきおき）とで、その日の内に国中へ知れ渡った。別にその事について文句は申さぬ。芸事で宗山の留（とどめ）を刺したほどの豪（えら）い方々、是非に一日、山田で謡（うたい）が聞かして欲しい、と羽織袴（はおりはかま）、フロックで押寄せたろう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不所存もの、恩地源三郎が申渡す、向後一切（いっせつ）、謡を口にすること罷成（まかりな）らん。立処（たちどころ）に勘当だ。さて宗山とか云う盲人、己（おの）が不束（ふつつか）なを知って屈死した心、かくのごときは芸の上の鬼神（おにがみ）なれば、自分は、葬（とむらい）式の送迎（おくりむかい）、墓に謡を手向きよう、と人々と約束して、私はその場から追出された。

あとの事は何も知らず、その時から、津々浦々をさすらい歩行く、門附の果敢い身の上。」

二十三

「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあったを工面したのがはじまりで、一銭二銭、三銭じゃ木賃で泊めぬ夜も多し、日数をつもると野宿も半分、京大阪と経めぐって、西は博多まで行ったっけ。

何んだか伊勢が気になって、妙に急いで、逆戻りに

また来た。……

私が言ったただ一言、（人のおもちゃになるな。）と言ったを、生命がけで守っている。……可愛い娘に逢ったのが一生の思出だ。

どうなるものでもないんだから、早く影をくらましたが、四日市で煩って、女房さん。」

と呼びかけた。

「お前さんじゃないけれど、深切な人があった。やっと足腰が立ったと思いねえ。上方筋は何でもない、間違って謡を聞いても、お百姓が、（風呂が沸いた）で竹法螺吹くも同然だが、東へ上って、箱根の山のど

てっぱらへ手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、どう我慢がなるものか！　うっかり謡をうたいそうで危くってならないからね、今切は越せません。これから大泉原、員弁、阿下岐をかけて、大垣街道。岐阜へ出たら飛騨越で、北国筋へも廻ろうかしら、と富田近所を三日稼いで、桑名へ来たのが昨日だった。

　その今夜はどうだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなってこの家へ飛込んだ。が、流の笛が身体に刺る。いつもよりはなお激しい。そこへまた影を見た。美しい影も見れば、可恐しい影も見た。ここで按摩が殺す気だろう。構うもんか、勝手にしろ、似たものを

引つけて、とそう覚悟して按摩さん、背中へ摑ってもらったんだ。

が、筋を抜かれる、身を挘られる、私が五体は裂けるようだ。」

とまた差俯向く肩を越して、按摩の手が、それも物に震えながら、はたはたと戦きながら、背中に獅噛んだ面の附着く……門附の袷の褪せた色は、膚薄な胸を透かして、動悸が筋に映るよう、あわれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛一つ搦みついたように凄く見える。

「誰や！」

と、不意に吃驚したような女房の声、うしろ見られ

る神棚の灯(ともし)も暗くなる端に、べろべろと紙が濡れて、門(かど)の腰障子に穴があいた。それを見咎(みとが)めて一つ喚(わめ)く、とがたがたと、跫音(あしおと)高く、駈(か)け退(の)いたのは御亭どの。いや、困った親仁(おやじ)が、一人でない、薪雑棒(まきざっぽう)、棒千切(ぼうちぎ)れで、二人ばかり、若いものを連れていた。

「御老体、」

雪叟が小鼓を緊(し)めたのを見て……こう言って、恩地源三郎が儼然(げんぜん)として顧みて、

「破格のお附合い、恐(おそれ)多いな。」

と膝に扇を取って会釈をする。

「相変らず未熟でござる。」
と雪叟が礼を返して、そのまま座を下へおりんとした。
「平に、それは。」
「いや、蒲団の上では、お流儀に失礼じゃ。」
「は、その娘（こ）の舞が、甥（おい）の奴の俤（おもかげ）ゆえに、遠慮した、では私も、」
と言った時、左右へ、敷物を斉（ひと）しく刎（は）ねた。
「嫁女、嫁女、」
と源三郎、二声呼んで、
「お三重さんか、私は嫁と思うぞ。喜多八の叔父源三

郎じゃ、更めて一さし舞え。」

二人の名家が屹と居直る。

瞳の動かぬ気高い顔して、恍惚と見詰めながら、よろよろと引退る、と黒髪うつる藤紫、肩も腕も嫋娜ながら、袖に構えた扇の利剣、霜夜に声も凛々と、

「……引上げたまえと約束し、一つの利剣を抜持って……」

肩に綾なす鼓の手影、雲井の胴に光さし、艶が添って、名誉が籠めた心の花に、調の緒の色、颯と燃え、ヤオ、と一つ声が懸る。

「あっ、」

とばかり、屹と見据えた——能楽界の鶴なりしを、雲隠れつ、と惜まれた——恩地喜多八、饂飩屋の床几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！　鼓を打つ！」と身を揉んだ、胸を切めて、慌しく取って蔽うた、手拭に、かっと血を吐いたが、かなぐり棄てると、右手を摑んで、按摩の手をしっかと取った。

「祟らば、祟れ、さあ、按摩。湊屋の門まで来い。もう一度、若旦那が聞かしてやろう。」

と、引立てて、ずいと出た。

「（源三郎）……かくて竜宮に至りて宮中を見れば、

その高さ三十丈の玉塔に、かの玉をこめ置(おき)、香花(こうげ)を備え、守護神は八竜並居(なみい)たり、その外悪魚鰐(わに)の口、遁(のが)れがたしや我(わが)命、さすが恩愛の故郷(ふるさと)のかたぞ恋しき、あの浪のあなたにぞ……」

その時、漲(みなぎ)る心の張(はり)に、島田の元結(もとゆい)ふッつと切れ、肩に崩るる緑の黒髪。水に乱れて、灯に揺(ゆら)めき、畳の海は裳(もすそ)に澄んで、塵(ちり)も留(とど)めぬ舞振(まいぶり)かな。

「(源三郎)……我子(わがこ)は有(あ)らん、父大臣もおわすらむ……」

と声が幽(かす)んで、源三郎の地(じ)謡う節が、フト途絶えようとした時であった。

この湊屋の門口で、爽に調子を合わした。……その声、白き虹のごとく、衝と来て、お三重の姿に射した。

「（喜多八）……さるにてもこのままに別れ果なんかなしさよと、涙ぐみて立ちしが……」

「やあ、大事な処、倒れるな。」

と源三郎すっと座を立ち、よろめく三重の背を支えた、老の腕に女浪の袖、この後見の大磐石に、みるの緑の黒髪かけて、颯と翳すや舞扇は、銀地に、その、雲も恋人の影も立添う、光を放って、灯を白めて舞うのである。

舞いも舞うた、謡いも謡う。はた雪叟が自得の秘曲に、桑名の海も、トトと大鼓の拍子を添え、川浪近くタタと鳴って、太鼓の響に汀を打てば、多度山の霜の頂、月の御在所ケ嶽の影、鎌ケ嶽、冠ケ嶽も冠着て、客座に並ぶ気勢あり。

小夜更けぬ。町凍てぬ。どことしもなく虚空に笛の聞えた時、恩地喜多八はただ一人、湊屋の軒の蔭に、姿蒼く、影を濃く立って謡うと、月が棟高く廂を照らして、渠の面に、扇のような光を投げた。舞の扇と、うら表に、そこでぴたりと合うのである。

「(喜多八)……また思切って手を合せ、南無や

志渡寺(しどじ)の観音薩埵(さった)の力をあわせてたびたまえとて、大悲の利剣を額にあて、竜宮に飛び入れば、左右へはっとぞ退(の)いたりける、」

と謡い澄ましつつ、

「背(せな)を貸せ、宗山。」と言うとともに、恩地喜多八は疲れた状(さま)して、先刻(さっき)からその裾に、大きく何やら踞(うずく)まった、形のない、ものの影を、腰掛くるよう、取って引敷(ひっし)くがごとくにした。

路一筋白くして、掛行燈(かけあんどん)の更けたかなたこなた、杖を支(つ)いた按摩も交って、ちらちらと人立ちする。

明治四十三（一九一〇）年一月

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房
1996（平成8）年3月21日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集」岩波書店
1942（昭和17）年7月刊行開始
※底本で句点が抜けている箇所は親本を参照して補いました。
※誤植を疑った箇所はちくま日本文学全集を参照しました。
入力：門田裕志
校正：砂場清隆
2002年1月9日公開

２００５年9月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。